

特別史跡 讀岐国分寺跡

昭和60年度発掘調査概報



国分寺町教育委員会

例　　言

- 1 本書は、香川県綾歌郡国分寺町国分に所在する特別史跡讃岐国分寺跡の昭和60年度保存整備事業にともなう発掘調査の概要である。
- 2 本事業は、国庫補助にともなう発掘調査として、特別史跡讃岐国分寺跡調査整備委員会・香川県教育委員会の指導を受け、香川県綾歌郡国分寺町教育委員会が実施した。
- 3 発掘調査および本書の作成・編集は、文化庁・調査整備委員会・香川県教育委員会および奈良国立文化財研究所の指導を受け、国分寺町教育委員会主事松尾忠幸が担当した。
- 4 本書の作成に際し、以下の方々のお世話をになった。

奈良国立文化財研究所 町田 章・岡田英男・巽淳一郎・上原真人

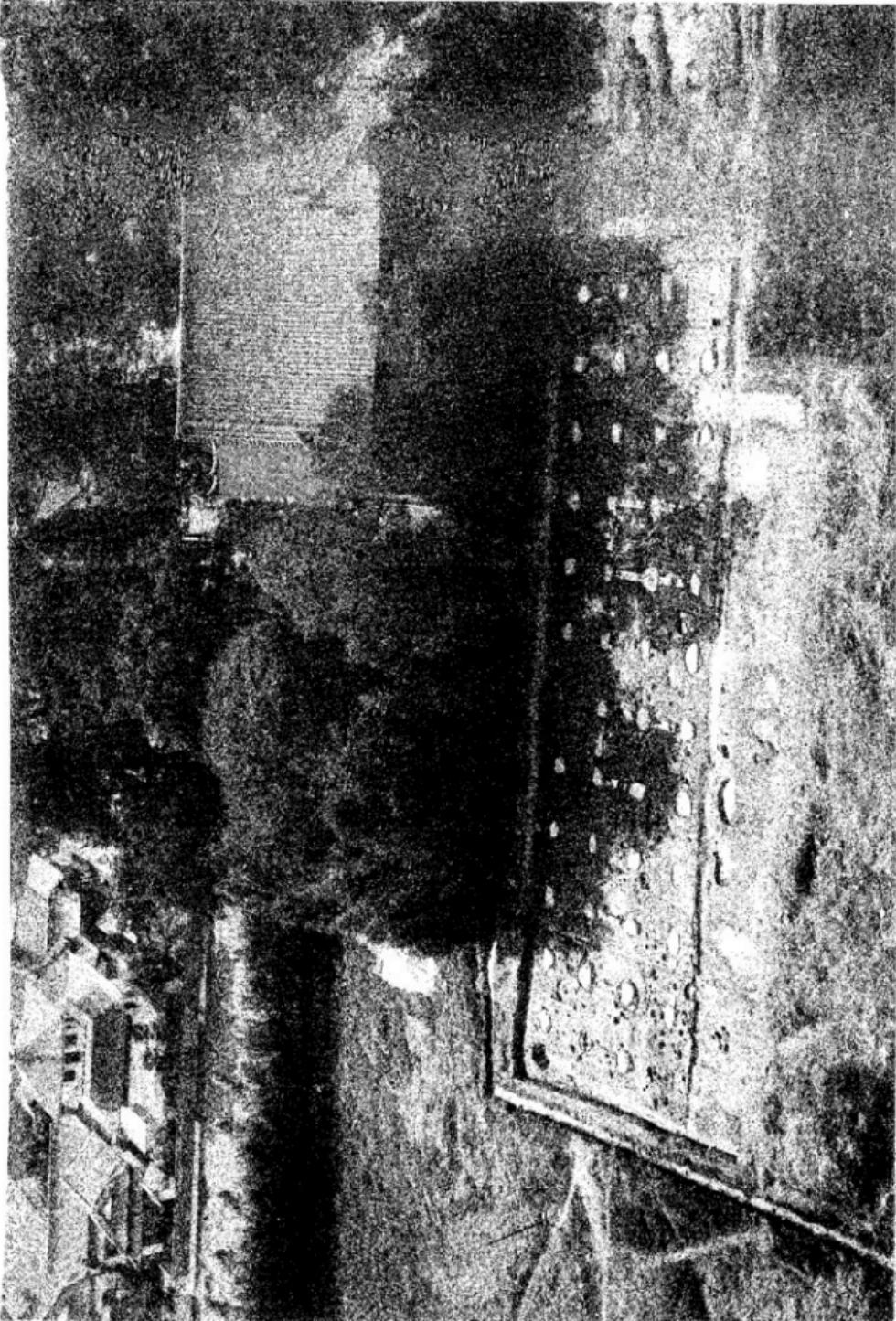
文化庁 加藤允彦

香川県教育委員会 松本豊胤・渡辺明夫・松本敏三・藤好史郎

善通寺市教育委員会 笹川龍一

善通寺市文化財保護協会会員 安藤文良

- 5 なお、僧房跡の建築学的検討、僧房所用石材の地質学的検討に関しては各々、岡田英男氏、香川大学農学部農業工学科 斎藤実氏、横瀬廣司氏の玉稿を賜った。
- 6 出土した遺物については、国分寺町教育委員会が保管している。



目 次

第1章 気象に至る経過.....	1
第2章 調査概要・調査日誌.....	2
第3章 遺構.....	4
第4章 遺物.....	8
(1)瓦.....	8
(2)土器・木器・金属器.....	16
第5章まとめ.....	20
付論1 諸岐国分寺僧房跡の復原的考察.....	21
付論2 諸岐国分寺僧房跡礎石の地質面からの観察.....	26

図版目次

PL. 1 (1)調査区全景（西から）	PL. 7 (1)切り欠きを持つ地覆 (5一ロ礎石付近・北から)
(2)調査区全景（北から）	08台形堀を転用した地覆 (10一ロハ礎石間・南から)
(3)調査区全景（東から）	09暗渠（東6間・南から）
(4)僧房跡東第一房（北から）	10SE16(調査区南東隅・北から)
(5)僧房跡東第二房（北から）	8 僧房跡における主要な軒瓦の 組み合わせ
(6)僧房跡東第三房（北から）	9 軒丸瓦
(7)僧房跡東3間（南から）	10 軒丸瓦・軒平瓦
(8)僧房跡東6間（南から）	11 軒平瓦
(9)中央間の南北溝（南から）	12 上器
(10)中央間の南北溝（北から）	13 土製品・木器・金属器
5 01東9間北側附落溝の基壇化粧（北から）	14 僧房跡礎石(1)
02東3・4間北側附落溝の基壇化粧（南東から）	15 僧房跡礎石(2)
03東3・4間北側附落溝の基壇化粧（北西から）	16 僧房跡礎石・加工石材
6 06木製地覆底の残る切石(4一ハ礎石付近・東から)	
07軒平と塙を使った地覆(6一ロ礎石付近・東から)	
08切り欠きを持つ地覆(5一ハ礎石付近・東から)	

挿図目次

第1図 僧房跡遺構図.....	5	第7図 9世紀中頃の軒瓦の組み合わせ…12
2 細部断面図・立面図.....	6	8 10世紀中頃の軒瓦の組み合わせ…13
3 東9間西側礎石付近土層図.....	7	9 SK830出土土器実測図…17
4 軒丸瓦実測図.....	9	10 線輪陶器・木器・金属器実測図…19
5 軒平瓦実測図.....	10	巻末折込 諸岐国分寺跡発掘調査位置図
6 8世紀中頃の軒瓦の組み合わせ…11		

表 目 次

第1表 年度・地点別軒瓦出土点数一覧 … 14	第2表 僧房跡軒瓦の小地区別出土数…15
-------------------------	----------------------

第1章 調査に至る経過

特別史跡讃岐国分寺跡の中心部分は、現在もなお西園八十八ヶ所第八十番札所である白牛山国分寺として、參詣者の列が絶えない。境内には、金堂跡・塔跡の礎石が原位置で残っており、また、講堂跡の礎石の上に建てられたと思われる現本堂があり、如何に、讃岐国分寺が充実した寺であったかを物語っている。しかし、讃岐国分寺跡周辺も例外なく開発の波が押し寄せており、指定寺域北端近くまで住宅が建ち並ぶようになり、昭和51年11月、指定寺域内北辺中央部にも、現状変更申請が提出された。これを契機として、国分寺町教育委員会は、国分寺町の町名に由来する国分寺の文化遺産を保護すべく、文化庁・香川県教育委員会の指導のもとに史跡地の公有化にとりくみ、昭和57年度までに指定地約5万m²のうち22453.67m²を公有化した。これにひきつづいて、史跡の保存と住民生活との調和をはかり、この掛け替えのない重要な史跡をいかに現代に活用するかを課題として、昭和62年度を目標とした史跡地の整備・公園化を推進し、昭和58年度には史跡整備に先立つ第1年次の発掘調査に着手した。昭和58年度の調査では東端築地・北端築地・東限大溝を検出し、特に東端築地は指定寺域東限より15m西で検出し、寺域の移動があったことを確認した。昭和59年度には新たに特別史跡讃岐国分寺跡調査・整備委員会を発足させ、香川県教育委員会と調査・整備委員会の指導のもとに、発掘調査・整備計画を推進することになった。昭和59年度の発掘調査では、東大門と講堂跡東方地区における建物の有無の確認を目的として実施し、東大門は検出できなかったが、東限大溝を確認し、講堂跡東方地区では、奈良時代の建物としては、鐘楼跡と思われる2間×3間の南北棟礎石建物を検出した。

昭和60年度は、史跡整備に伴なう発掘調査としては第3年次にあたり、昭和60年度をふくむ発掘調査で得られた成果を取り入れた讃岐国分寺跡環境整備構想（試案）を策定することになった。その策定については、県からの助言と国分寺町からの要請にもとづき、県の指導のもとに香川大学農学部吉田重幸助教授・四国学院大学植原正博講師によって、原案が練られた。そこで、基本構想を策定するのに必要な資料として、讃岐国分寺の中では最も長大な建物と思われる僧房跡の調査を講堂跡北方地区で実施した。

特別史跡讃岐国分寺調査・整備委員会の構成

国分寺町長	津村文男	奈良国立文化財研究所	坪井清足
国分寺町議会代表	中西芳一	学職経験者 古代史	国島浩正
国分寺町文化財保護委員会代表	片山 要	〃 考古学	丹羽佑一
宝住寺住職	童鑑曠純	〃 造 圈	吉田重幸
地元代表	中山甲平	〃 町 内	水谷 宏

第2章 調査組織・調査日誌

1 調査組織

調査は、調査整備委員会・文化庁・奈良国立文化財研究所・香川県教育委員会の指導を受け国分寺町教育委員会が実施した。調査参加者は下記のとおりである。

事務局	岡内節嘉	国分寺町教育長
	佐々木英典	国分寺町教育委員会次長
	鎌田良博	国分寺町教育委員会社会教育主事
調査指導	岡田美男	奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部長
	巽淳一郎	奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部考古第2調査室員
	町田 章	奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター集落遺跡研究室長
	上原真人	奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター集落遺跡研究室員
調査員	松尾忠幸	国分寺町教育委員会主事
調査補助員	峰明秀・彈正原紀之・近藤美都・松本節子(香川大学)、三谷真由美(四国学院大学)、黒川誠(近畿大学)、片岡孝展(徳島大学)、柳生志保(松陰女子短期大学)	
調査作業員	亀井真由美・桑村マスミ・横川綾子・柴礼子・三川キクエ・渋田美代子・千田ツイ子・谷本悦子・細谷フサエ・宮下秀子・山川豊子・山本政子・大比賀吉秋	

2 調査日誌抄

6月 調査の諸手続き準備のうえ、1日より推定僧房跡(講堂跡北方地区)の調査に着手。耕作土は機械を使って排除する。床土から約30cm下で、黄褐色の基壇土を検出。14日までに僅1m~1.5cm程の10個の礎石を確認した。礎石の心々距離は梁行、桁行ともに4m等間となる。15日から7月8日まで雨のため室内で遺物整理を行なう。

7月 9日：東3間の北2間分を取り囲むように地覆石が残っているのを確認。基壇北雨落溝では平瓦・丸瓦を立てて護岸している。南雨落溝では基壇化粧は見られない。25日：全体を清掃して地覆石を中心に写真撮影を行なう。

8月 2日：東6間の南から2列目の礎石間で、非常に残りの良い地覆石を検出。地覆石の上面は著しく磨滅しており、これが通路の敷石であることを推測させる。3日：地覆石の近くから白銅製火舎香炉の獸脚が出土。10日までに、26個の礎石と2ヶ所の礎石抜取り穴を検出。11日：調査指導のため、奈良国立文化財研究所町田章氏来訪。19日から31日までに草刈作業および除草剤を散布する。

9月 作業員を5名増やして発掘を再開する。1日：伽藍中軸線上を流れる現代溝と東第三房にかかる現代溝を西と東へ迂回させる。2日：中央間では底に平瓦を敷き、埠、丸瓦、平板

で護岸した暗渠を検出。また、北列と南列に地覆状の塙が東西に並べられているのを確認する。
10日：東9間の西側の礎石間で台形塙を地盤として転用しているのを検出。30日：44個の礎石を確認したが、全体の規模、開取りについては兩廻を残す。

10月 6日：礎石掘形から金銅製の仏具受皿が出土。7日より奈良国立文化財研究所賀淳一郎氏・上原真人氏の指導のもとで調査を続行。僧房は東西88m南北16mの基壇上に建つ3間×21間の東西棟礎石建物であり、雨落溝出土土器から10世紀後半には廃絶したことが判明。

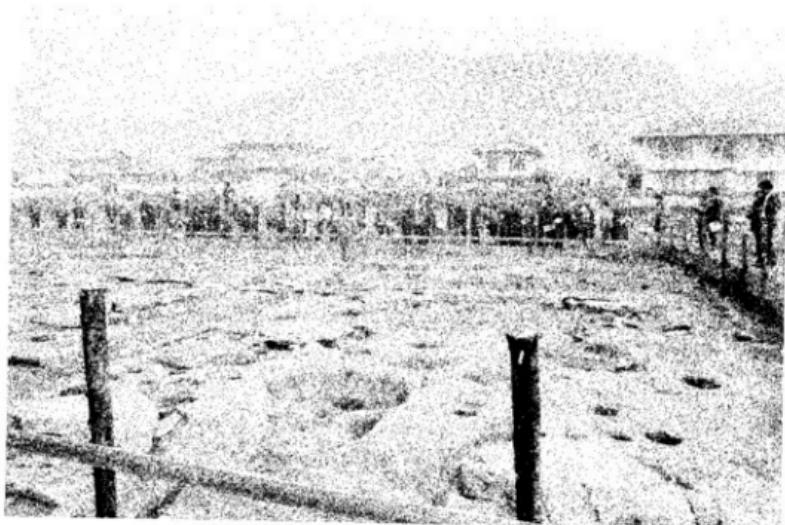
10日：奈良国立文化財研究所岡田英男氏の指導助言により僧房の間取りが判明。また、礎石の掘形から9世紀代の土器が出土したが、礎石をかさあげした結果、混入した土器と分かる。

15日：東第三房基壇上で多数の柱穴を検出したが、建物としてはまとまらない。16日～23日：土層図作成。24日：全体清掃作業を行なう。25日～30日：地上遺構写真撮影。

11月 1日：県の協力により航空写真測量。10日：やり方杭を設置し測量にとりかかる。

15日：調査整備委員会を開く。19日：上原真人氏の指導のもとで調査を続行。20日：調査区北西隅を発掘調査。径2m程の土竈を検出するが、他に顕著な遺構は存在しない。

12月 10日：遺構測量、礎石断面図、四周土層図など完了。12日：調査区南東隅の井戸を完掘。遺物は13世紀代に属している。井戸測量。13日：礎石1個ずつ写真撮影。16日～20日：遺構に川砂を敷き埋め戻し完了。



現地説明会の風景

第3章 遺構

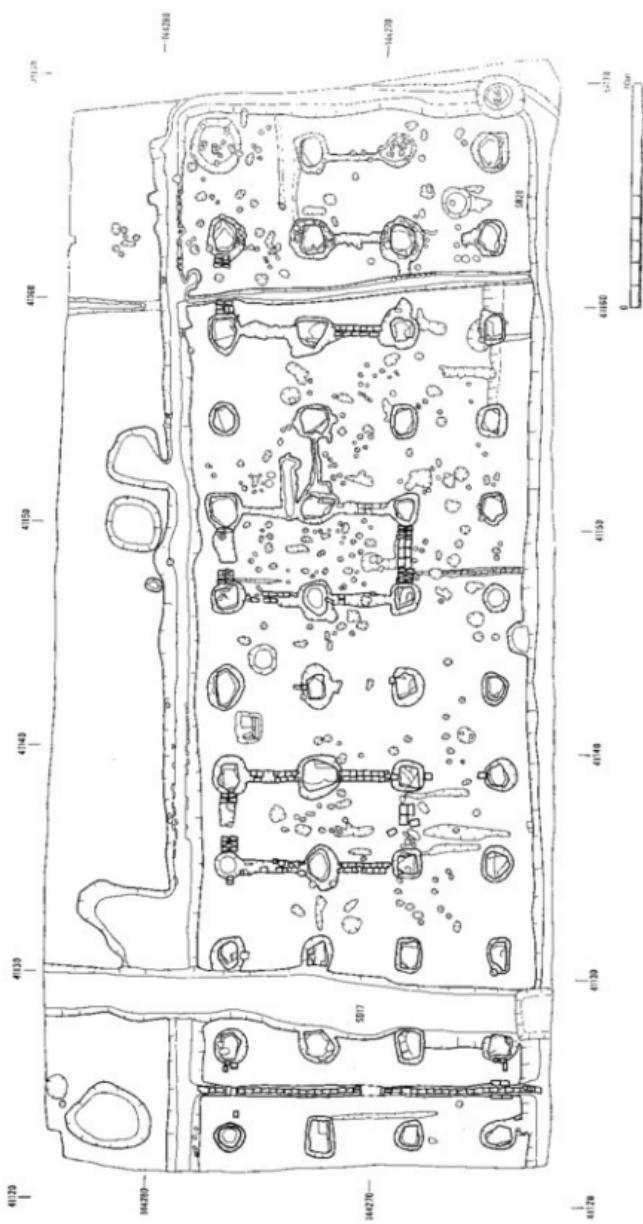
満食跡北方地区では、奈良時代から近世までの遺構が重複している。上本層序は、上から、(1)耕作土、(2)末土、(3)灰褐色粘質土(12世紀以降の土器を主体的に出土)、(4)端灰褐色粘質土(10、11世紀代の土器を主体的に出土)、(5)灰褐色粘質土(地山)である。

僧房跡SB20(PL. 1~7, 第1~3図) 調査の結果、僧房は東西88m、南北16mの基壇上に連つ桁行21間、梁行3間の東西棟礎石建物であることが判明した。今次調査では、中央間を含む東11間分を検出し、別に西端の礎石位置も確認している。礎石の柱間寸法は桁行・梁行とともに4m等間で、発掘調査区内では44個が原位置で残り、4カ所で礎石抜取り穴を検出した。以下、検出した遺構の説明に際して、礎石の位置表示は、付論2の中で記述しているように、調査区北西隅の礎石を始点として、縦軸を北から南に向けてイ・ロ・ハ・ニ、横軸を西から東に1~12までの数字で表示し、桁行方向の柱間については、西から中央間・東1間・東2間・東3間……東10間と呼称する。また、付論1の岡田英男氏の考察で明らかなように、本僧房は東2・3・4間、東5・6・7間、東8・9・10間を単位とする3間1房の形態をとる。本稿では、これを各々東第一房、東第二房、東第三房とする。

基壇は地山(灰褐色粘質土)上に黄褐色土を盛って造成するが、明確な版築は行なっておらず、基壇上面は北から南へ向けて緩やかに下降する。北・東・南に幅50cm、深さ20cmの雨落溝がめぐるが、南雨落溝の南脇は調査区外となる。東9・10間の北側では、径30cm前後の自然石を1段1列に立て並べた基壇化粧が残る(PL. 5-(11), 第2図8)。この石の間に凝灰岩切石が2個深く据えられているが、これが創建期の基壇化粧の名残りかもしれない。また、東3・4間の北側の雨落溝では、南岸に平瓦、北岸に丸瓦の凸面を外に向けて直立させて護岸している(PL. 5-(12・13), 第2図6・7)。基壇化粧の崩壊にともなう応急処理であろう。

中央間の中軸線上には、南北雨落溝を結ぶ幅40cm、深さ25cmの南北溝がある(PL. 4)。底には平瓦凹面を上にして1列に敷き並べ、両岸を塙・丸瓦もしくは平板で護岸する。塙で護岸した部分は南側柱筋上にあり、同じ側柱筋の中央間東側の礎石の際には、地覆状の塙が残る。北からの排水を東・西両雨落溝まで迂回させるには、東西規模が大きいので、一部をこの溝で排水したのであろう。なお、この溝は僧房の南北中軸線にも合致する。

東3間・東6間・東9間には礎石間に組み地覆が残る(PL. 3)。南北方向の地覆は、北2間分の礎石間にあり、30cm×20cm×10cm前後の凝灰岩切石を1段2列に並べる。風化の状態から、石列中央に幅40cm内外の角材を南北方向に置いていたと推定できる(PL. 6-(14))。また、礎石近くの切石には切り欠きがあって、方形の納穴状を呈する(PL. 6-(16), PL. 7-(17))。なお、東9間の礎石10一ロと10一ハとの間の地覆西列に台形の塙を使用しているが、これは後世の修理時に転用したものであろう(PL. 7-(18))。東西方向の地覆は北側柱筋と南から2列目の柱



第1圖 偷房跡遺構圖（1：250）

1 複石 5-1 口付近立面図 35.0*



2 複石 11-1ハ断面図



35.0*

3 中央間南柱筋断面図

36.0*

4 中央間北柱筋断面図

35.0*

5 東 6 間の南から 2 列目複石間断面図

35.0*

6 東 3・4 間の北側雨落溝の立面図（外側）

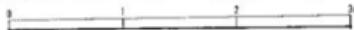
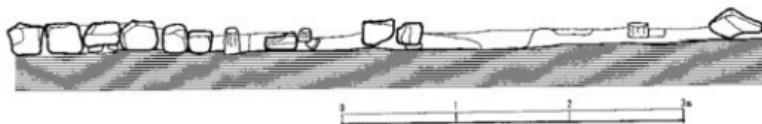
35.0*

7 東 3・4 間の北側雨落溝の立面図（内側）

35.0*

8 東 9・10 間の北側雨落溝の立面図

35.0*



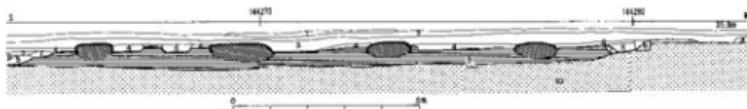
第 2 図 細部断面図・立面図

筋とに残る。礎石から70cmの部分に台形の埠6個を深く埋め込み、その間を1段高く44cm×30cm×10cmの凝灰岩切石を2列に3個ずつ置く。この凝灰岩切石は著しく磨滅して、邊縁の崩石であったと推定できる。ただし、礎石の中央部、南北幅12cmは全く磨滅しておらず、東西方向に長く角材を置いていたらしい(PL. 3, 第2図5)。地盤の所見は残りの良い部分から全体を推測したものであるが、東3間・東6間・東9間においては、抜取り痕跡によって多少の差異はあるにしても、上述の状況が復原できる。しかし、他の間においては東4間の礎石6一ロの北に埠と軒平瓦とを用いた簡単な地盤が残る(PL. 6-1(15), 第2図1)ほかは、地盤の抜取り痕跡すらない。このほか東6間の礎石7一ハの南端から南雨落溝に向けて南北に丸瓦を伏せて並べた排水暗渠が走るが、この性格は不詳(PL. 7-1(19))。雨落溝中からは10世紀中頃までの土器が出土し、これによって10世紀後半には僧房の機能が停止したと推定できる。軒瓦は8世紀中頃のものが最も多く、造営年代を示す。また、礎石の下から9世紀中頃の土器が出土している。礎石の沈下に際して、かさあげを行なった結果であり、東第三房の礎石11一ハにおいて、かさあげのための掘形が礎石の据付け穴に切り込んだ状態を確認した(第2図2)。この時期に、東第三房で大幅な修理を行なったのであろう。

SE16 (PL. 7-(20)) 調査区南東隅で検出した径2m、深さ2.5mの井戸。基壇裾を破壊しており、僧房廃絶後のものと考えられる。井戸枠は残っていなかったが、杓子や曲物容器などの木製品が出土した。出土した土器から13世紀前半には埋没していたと考えられる。

SD17 東1間の間を南北方向に走る溝で、床土層から掘り込んでいる。幅2.5m前後、深さ80cmで、方位は北で東へ約1度振れている。埋土は、灰褐色粘質土で瓦片を非常に多く含む。出土土器は、中近世のものが主体をなす。

その他の遺構 僧房基壇上で多数の柱穴を検出した。径30cm前後の柱根を残すものや、中世の冶金関係の炉跡、焼土ピットも検出したが、建物としてまとまるものはない。



第3図 東9間西側礎石付近土層図

- 1 耕作土 2 床土 3 灰褐色粘質土 4 暗褐色粘質土 5 暗灰色粘質土 6 暗褐色粘質土
- 7 黄灰色砂質土(裏込め) 8 黄灰色粘質土 9 黄褐色粘質土(基壇土) 10 灰褐色粘質土(地山)

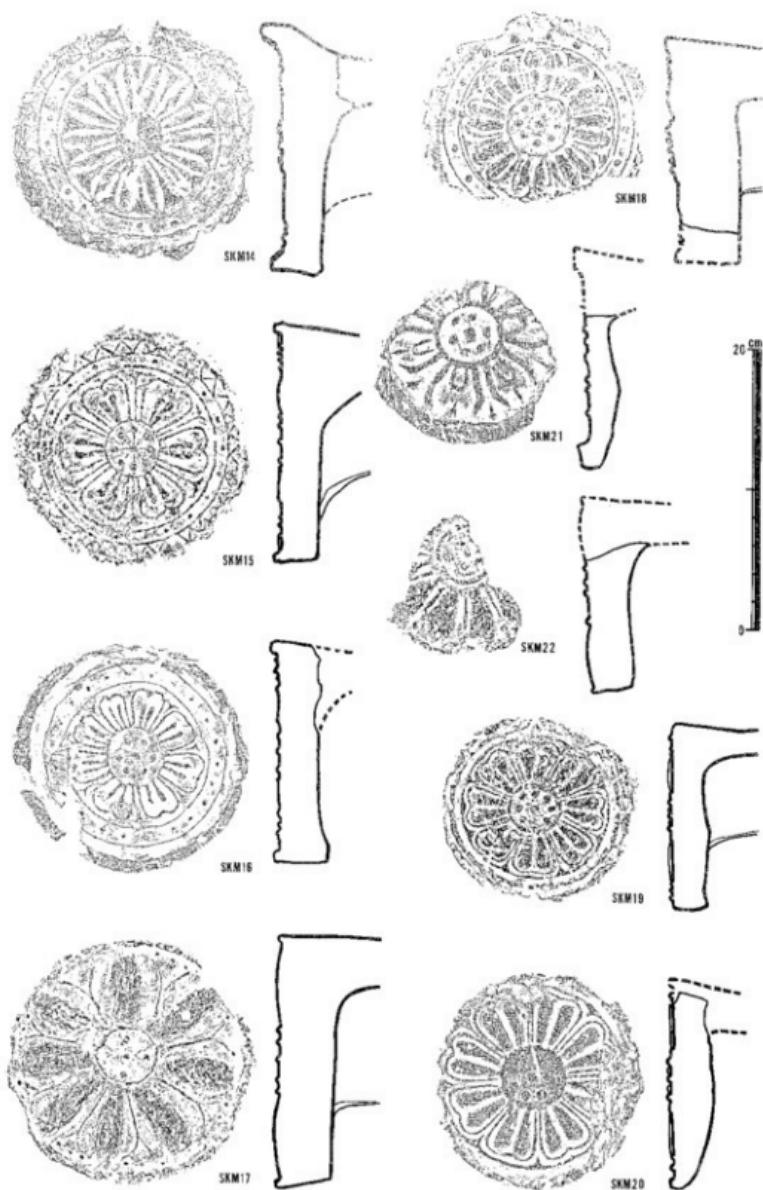
第4章 遺物

1 瓦 (PL. 9~11, 第4~3図, 第1~2表)

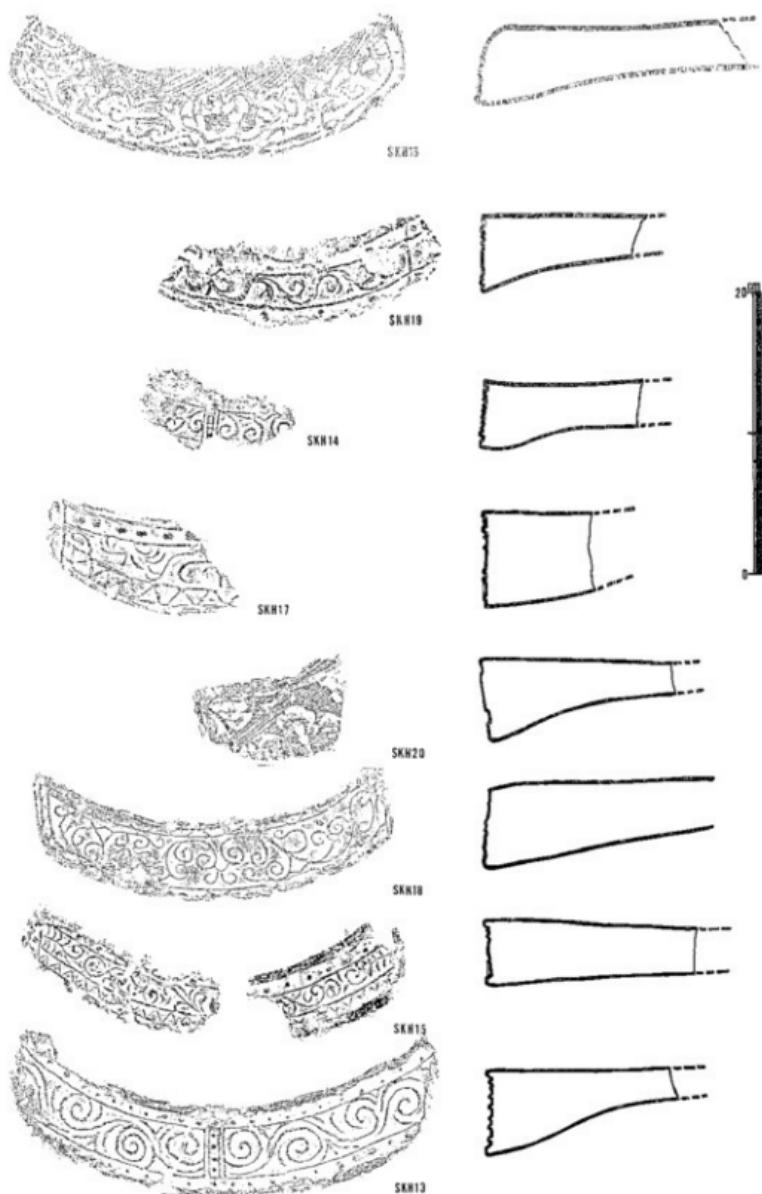
昭和60年度の発掘調査では、軒丸瓦146個体、21型式22種、軒平丸が284個体、19型式21種が出上した。これらの型式の多くは、去年の概報で報告すみであるから省略し、新出の型式と過去の発掘調査では小破片のため、文様構成の理解できなかったものを採りあげる。また、丸瓦、平瓦は未整理で、その分析は将来の課題としておく。新出の軒瓦の中には、僧房廃絶後に、現国分寺本堂の造営・修理に際して廃棄されたと考えられるものも含まれているが、明らかに中・近世と思われる軒瓦はまだ型式番号を設定しておらず、今回は検討の対象からはずす。なお、発掘資料では瓦当部の残りの悪いSKM15・SKM18・SKH15に関しては、吉本文氏、里野辰巳氏保管品を図版・挿図に借用させていただいた。

軒丸瓦 (PL. 9・10, 第4図) SKM14は細弁4葉蓮華文軒丸瓦。突出した中房に1+5の蓮子を置く。外区内縁には20個の珠文、外区斜縁には29個の線鋸歯文がめぐる。灰色を呈し、焼成堅緻。瓦当面にはハナレ砂を施した痕跡がある。瓦当面径17.5cm。SKM15は複弁6葉蓮華文軒丸瓦。圓線で囲んだ中房に1+8の蓮子を置き、対角にある蓮子は直線で結び合っている。外区内縁には20個の珠文、外縁に31個の線鋸歯文がめぐる。黄茶色を呈し、焼成はやや軟質。國分尼寺跡からも出土。瓦当面径17cm。SKM16は複弁8葉蓮華文軒丸瓦。圓線で囲む中房に1+6の蓮子を置く。外区内縁には22個の珠文を配し、外縁の線鋸歯文は省略されている。赤褐色を呈し、焼成はやや軟質。瓦当面径16.0cm。SKM17は単弁8葉蓮華文軒丸瓦。圓線で囲んだ中房に1+4の蓮子を置く。間弁はY状を呈し、間弁位置に対応して外区に各3個の珠文を置く。暗赤褐色を呈し、焼成はやや軟質。瓦当面径17.3cm。SKM18は複弁8葉蓮華文軒丸瓦。突出した中房には、1+8の蓮子を置く。外区内縁の珠文は16個、外縁の線鋸歯文は省略されている。國分尼寺跡で主体的に出土し、SKH01B・Cの一方と組み合う蓋然性は高い。青灰色を呈し、焼成堅緻。瓦当面径16.7cm。SKM19は複弁8葉蓮華文軒丸瓦。突出した中房に1+8の蓮子を置く。珠文、線鋸歯文は省略されている。青灰色を呈し、焼成堅緻。瓦当面径13.2cm。SKM20は複弁8葉蓮華丸軒丸瓦。突出した中房に1+8の蓮子を置く。外区は珠文・線鋸歯文とも省略されている。瓦当裏面下端部を弧状に整形しており、僧房廃絶後のものと思われる。黒褐色を呈し、焼成はやや軟質。瓦当面径15.0cm。SKM21は単弁6葉蓮華丸瓦。圓線で囲んだ中房に1+6の蓮子を置く。赤褐色を呈し、焼成は軟質。瓦当面径16.0cm。SKM22は単弁10葉蓮華文軒丸瓦。SKM17と花弁の形態が似ている。間弁は棒状に簡略化され、その上外区に珠文を1個置く。黄褐色を呈し、焼成は軟質。瓦当面径14.0cm (復原径)。

軒平瓦 (PL. 10・11, 第5図) SKH13は長方形の区画内に納めた4個の珠文を中心飾りとし、背向する葉手2葉を左右に各2転させた均整唐草文軒平瓦。上下外区には珠文がめぐる。淡黄色



第4図 軒丸瓦実測図 (1 : 4)



第5図 軒平瓦実測図（1：4）

を呈し、焼成は軟質。上弦幅28.5cm。瓦当の厚さ6.5cm。SKH14は小破片のため文様構成不明。ただし、中心飾りはSKH13と似ている。SKH15は三葉文を入れたC字上向形を中心飾りとする均整唐草文軒平瓦。上外区・基区には珠文を施し、下外区には線施唐草文がめぐる。灰色を呈し、焼成は堅緻。上弦幅26.0cm（復元）。瓦当厚さ5.0cm。SKH16は著しく崩れた唐草文軒平瓦で、文様構成不明。黒褐色を呈し、焼成はやや堅緻。上弦幅26.0cm。瓦当厚さ5.6cm。SKH17は小片のため文様構成不明。上外区に珠文、下外区には線施唐草文がめぐる。黄褐色を呈し、焼成は軟質。瓦当厚さ7.0cm。SKH18は左右の轍手の文様構成がくずれているが、均整唐草文軒平瓦である。瓦当文様から、11・12世紀代のものと考えられ、講堂修理の瓦が流れこんできたのであろう。赤褐色を呈し、焼成は軟質。上弦幅24.0cm。瓦当厚さ5.0cm。SKH19は左から右へ流れる偏行唐草文か。黄褐色を呈し、焼成は軟質。瓦当厚さ5.0cm。SKH20は陰刻花文を瓦当の上下から交互に覗かせた半載花文軒平瓦。すべて灰褐色粘質土中から出土し、僧房廃絶後に現本堂で使用されたものと思われる。十瓶山付近で焼かれたものであろう。淡白色を呈し、焼成は軟質。瓦当厚さ6.0cm。

軒瓦の組み合わせと実年代 古代讃岐に関する史料は少なく、国分寺造営時期も正確にはわからないが、『統日本紀』などから天平勝宝八(756)年には完成したと言われている。したがって、土器・瓦の年代を議論する場合、8世紀中頃を讃岐国分寺創建年代と仮定する。

今年度の調査に際して、奈良時代に比定できる数種の軒丸瓦・軒平瓦が出土している。これらの中から僧房創建期に使用された軒丸・軒平瓦の組み合わせを推定し、あわせて出土量の多い軒瓦に限ってその組み合わせを検討する。ただし、讃岐国分寺跡では、金堂跡・塔跡の礎石がほとんど原位置で残っているにもかかわらず、発掘調査を行なっていないため、その創建時的主要な軒瓦の組み合わせはわからない。

今後、伽藍中軸部の主要な軒瓦の組み合わせが判明した場合に、今回推定した僧房の主要な組み合わせに關しても再検討の必要が生ずるかもしれない。

組み合わせを決定する方法としては、各型式の小区ごとの出土量（特に雨落溝出土の軒瓦）・胎土・焼成・瓦当の文様・製作技術を考慮にいれた。

昨年度の概報では、SKH01が鐘楼跡SB02で最も多數を占めることがから、これを讃岐国分寺創建時の軒平瓦と考え、そのなかで文様の最も整ったSKH01Aが、同じく古式



第6図 8世紀中頃の軒瓦の組み合わせ



第7図 9世紀中頃の軒瓦の組み合わせ
平瓦SKH01Aにおいても認められる。すなわち、少なくとも僧房廃絶直前には、SKM03A

の軒丸瓦SKM01と組み合う可能性を指摘した。ところが、僧房跡では、SKH01Aが40点(15%)も出土しているのにSKM01は5点(2.4%)と少なく、両者の組み合せが僧房跡で成立しないことは明らかである。そこで、軒丸瓦SKM02A(24点、16.5%)・SKM03A(29点、20%)・SKM04(21点、14.5%)、軒平瓦SKH01A・SKH01B(50点、18.5%)・SKH01C(56点、21%)・SKH03(41点、15%)の各々に関して、小地区(3m方眼)ごとの出土量を示す第2表のようになる。軒丸瓦のなかで、SKM03Aが僧房南面落溝に集中しており、同様の傾向は軒

平瓦SKH01Aは僧房跡で最も多く出土した。これに次ぐ量を占めるSKM02A・SKM04、および文様的にSKM03Aに先行するSKM01とを比較した場合、断面形においてSKM01とSKM03Aとの共通性が指摘でき、特に筒部のとりつき位置においてSKM01・SKM03AのほうがSKM02A・SKM04よりも高く、より古式である点が指摘できる。また、SKH01AがSKH01B・Cよりも瓦当文様の上でより古式である点は既に指摘した。すなわち、瓦当文様や製作技術からみた場合、SKM03A・SKH01Aが僧房創建時における主要な組み合わせであった可能性が強い。

ただし、軒平瓦において、SKH01B・SKH01Cの出土量はSKH01Aを凌駕している。同様の傾向は昨年度調査した鐘楼跡SB02においても認められる。すなわち「創建時」軒平瓦のなかでも後出的なSKH01B・SKH01Cは、伽藍北辺の建物(僧房・鐘楼)においては、むしろ主体的なのである。型式的には、SKH01B・SKH01Cは「創建時」軒丸瓦のなかでも後出的なSKM04・SKM02Aと組み合う可能性が高く、僧房跡における両者の分布傾向(第2表)もこの見解を否定するものではない。このように「創建時」軒瓦における微妙な型式差を、遺構に即して詳細に検討することによって、今後、「創建時」における讃岐国分寺堂塔の造営過程を具体的に明らかにできるであろう。また、SKH01A・B・Cと同范の軒平瓦は讃岐国分尼寺跡でも出土している。しかし、尼寺ではSKH01Aの瓦范を彫り直した軒平瓦が主体的で、その製作技術・焼成は僧寺のSKH01Aと異なる。また、SKH01B・Cとの同范例も含めて、組み合う軒丸瓦は僧寺の場合とは異なるようである。このように、同范関係・製作技術・軒瓦の組み合わせなどの比較によって、僧寺と尼寺との創建年次差や造営体制の違いを明らかにする作業も将来の課題としておきたい。

なお、SKH01Bは、断面形において直線顎のものと曲線顎のものとがある。この差異が若干の年代差によるものか工入意によるものか判断できないが、直線顎：曲線顎=3:2の割合で出土している。

創建時の軒平瓦以外では、SKH03が比較的多く出土している。SKH03は、僧房内部の後補による地置施設としても使われており(PL. 6-(15)、第2図1)、隅切瓦も1点出土している。製作技術は、SKH01Aと同様に直線顎であり、凹面はほとんどがヘラケズリによって布目を消しているが、模骨痕が見られるものも数点あり、桶巻作りを思わせる。左右にゆ

るやかな波状に流れ、先端が丸味を帯びる唐草文は、京都では教王護国寺・貞觀寺などの9世紀半ばごろの軒平瓦にみられる。僧房跡における出土量や分布傾向では確言できないが、胎土・焼成の類似性からSKM05との組み合わせを考えたい。SKH03にはいぶし焼風のもと自然釉が付着するものがある。SKM05の瓦当文様は奈良時代の特徴を持っているが、講岐国分寺跡から出土する瓦の中でSKH03と同様な胎土・焼成を持つ軒丸瓦は他にない。

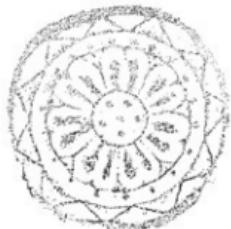
SKH03と同范の軒瓦は、香川県普通寺市にある金創寺跡からも出土しており、同寺創建時に用いられた可能性がある。金倉寺寺伝によれば、貞觀三年(861)には唐の青龍寺を模して御堂^(注1)の造営を完成したという。なお、僧房跡東第三房では、いくつかの礎石をかきあげて据え直した痕跡を確認した。このかさあげのための掘形から9世紀中頃のロクロ土師器が出土している。SKM05-SKM03の組み合わせが比較的多数を占めるのも、こうした大規模な修理工事にともなって、組織的な真き替えを行なった結果と考えてよかろう。

最後に、僧房最終時期の改築に使われたと思われる軒瓦の組み合わせを検討する。この軒瓦の組み合わせについては昨年度の概報でも述べたが、SKM07-SKH05Aであることは、瓦当文様、製作技術、胎土・焼成、出土量の点からも首肯できる。

SKH05Aは、京都の法性寺跡出土の中心飾りに『修』銘を持つ軒平瓦を模倣して作られたと思われ、10世紀中頃の実年代が考えられる。平瓦広端部凸面に別粘土を貼りつけて瓦当部を成形している。同范例は国分尼寺跡からも出土している。SKM07は、外区外縁に線鋸歯文、外区内縁に珠文がめぐり奈良時代の瓦当文様を踏襲しているが、瓦当部と筒部とが剥離したものがほとんどを占める。同范の軒丸瓦は香川県大川郡長尾町長尾寺から出土している。

注1 安藤文良氏の御教示を得た。

注2 普通寺市史



第8図 10世紀中頃の軒瓦の組み合わせ

(注1)

(注2)

年度(昭和)		56				57				60				年度(昭和)		58				59				60							
型式	地点	東	隈	大	門	S	B	S	B	計	東	隈	大	門	S	B	S	B	計	東	隈	大	門	S	B	S	B	計			
		隈	聚	地	周	推	定	地	周	邊	地	聚	地	周	邊	推	定	地	周	邊	地	聚	地	周	邊	推	定	地	周	邊	
軒 丸 瓦	S KM01	0	0	7	1	5	13	軒	平	瓦	S KH01A	4	3	4	4	40	55														
	02A	0	4	7	0	24	35				01B	2	5	15	1	50	73														
	02L	0	2	0	0	1	3				01C	10	9	8	1	56	84														
	03A	1	3	5	2	29	40				02	0	0	2	1	0	3														
	03L	1	1	1	0	0	3				03	4	3	3	8	47	59														
	04	1	5	4	2	21	33				04	0	0	1	1	1	1														
	05	1	1	2	1	3	8				05A	1	7	9	1	37	55														
	06	0	1	0	2	10	13				05B	0	0	1	0	1	2														
	07	0	3	5	2	12	22				06	0	0	1	1	1	1														
	08	0	0	1	0	9	10				07	0	1	1	0	5	7														
	09	0	1	1	0	9	11				08	0	2	0	0	5	7														
	10	0	0	0	1	1	2				09	0	6	1	0	1	8														
	11	0	0	0	1	2	3				10	0	2	0	0	4	6														
	12	0	0	1	1	2	4				11	0	0	2	0	0	2														
	13	0	1	0	0	0	1				12	0	0	0	1	4	5														
	14	0	0	1	0	7	7				13	0	0	0	1	3	4														
	15	0	0	0	0	1	1				14	0	0	0	0	8	8														
	16	0	0	0	0	1	1				15	0	0	0	0	3	3														
	17	0	0	0	0	2	2				16	0	0	0	0	2	2														
	18	0	0	0	0	1	1				17	0	0	0	0	6	6														
	19	0	0	0	0	2	2				18	0	0	0	0	1	1														
	20	0	0	0	0	1	1				19	0	0	0	0	1	1														
	21	0	0	0	0	1	1				20	0	0	0	0	2	2														
	22	0	0	0	0	3	3				計	5	22	34	13	146	220			計	21	38	48	20	270	397					

第1表 年度・地点別軒瓦出土点数一覧



37/382



第323页



SKM84



SKH01A

2					1		
1				1			
1	1	2	1		1		
	3	1	1				
2							
	1	1			1		1
		1	1		3		3
1	1	2	1	1	1	1	



SNH310

2	1	1		1	1	
	3	1				2
1	1	4			1	1
1	2	1	1			1
5	1	2	1			
1	1	1	1	2	1	2
1		1	1	1	1	1



SKH01C



303

第2表 僧房跡軒瓦の小地区別出土数
 (地区割りについては昭和59年度概報
 で述べているため記述を省略した。)

2 土器・木器・金属器 (Pl. 12~13, 第9・10図)

現状では、環状土器跡における出土土器の年代に関して、十分な検証ができるほどの資料は集まっていない。ここでは、過去3年間の発掘成績から、良好な一括資料とみなしうる遺構出土土器を紹介することによって今後の検討材料としたい。その実年代については、環状土器跡からは木簡の出土は1点もなく、共伴する灰陶陶器、綠釉陶器などの年代観を参考とする一方、平城京や香川県教育委員会における研究成果との対比によることが大きい。

SK830出土土器 (第9図1~31) 昭和58年度の発掘調査で一括資料として出土した。出土遺構は東端築地内側の土壤であり、地区名はFN-15となる。

SK830出土土器は全体に器面の保存状態が悪いが、多くの器種が揃っている。主なものには土師器皿・甕、須恵器杯・杯蓋・皿・高杯・甕・火舎などがあるが、上師器の杯は出土していない。土師器と須恵器の出土比率から、この時期は土師器部門一甕、須恵器部門一杯皿類を主体とした生産が行なわれていたことがわかる。これらはその形態や法量から、綾南町陶庄屋原窯跡出土土器の特徴を残しながら、やや後出的であり、奈良時代末期~平安時代初期に位置付けられよう。

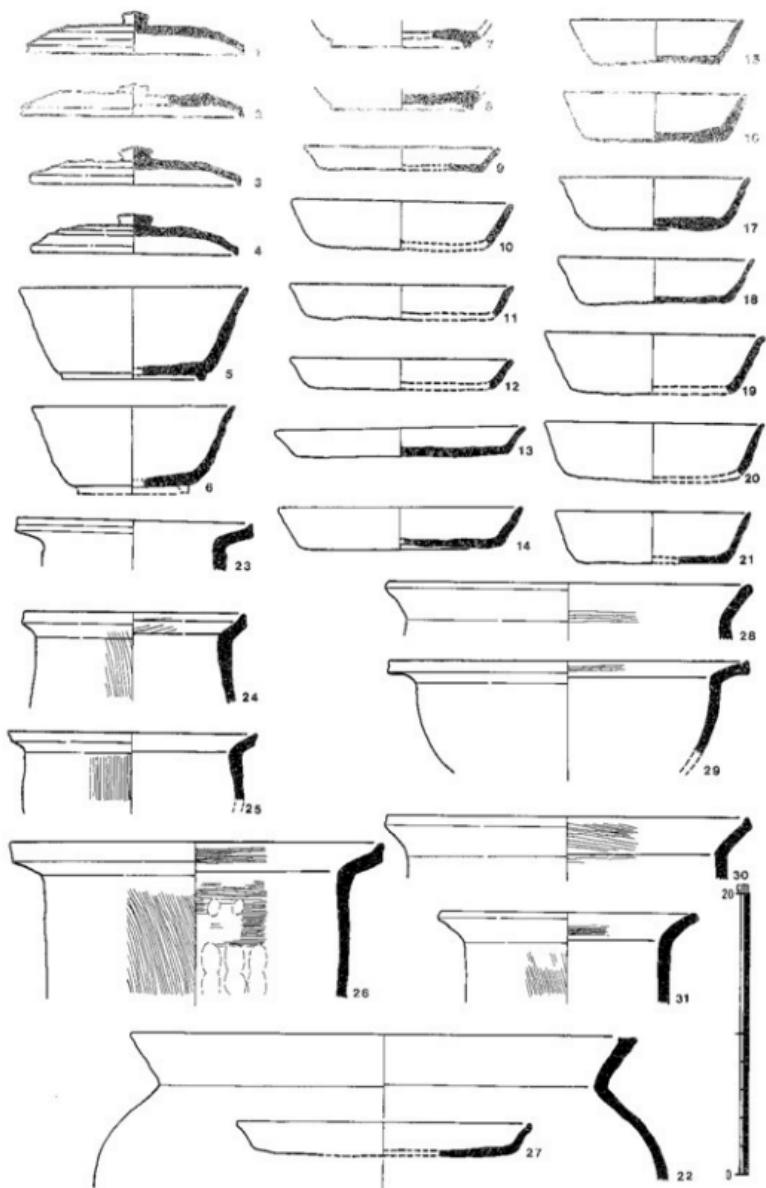
須恵器 杯・杯蓋では青灰色を呈し、硬い質のものが多数を占める。ほかには、暗灰色の自然釉を付着するものもある。皿においては、淡灰色のやや硬い質のものがほとんどである。これらの土器は、右回りのロクロを用いて作ったものが大多数を占める。

杯A 平坦な底部と斜上にまっすぐにひらく口縁部とからなる。底部下面是、ロクロで削ったものと削っていないものとがあり、後者には後に指でなでつけたものがあるが、不徹底におわっている。口径は13cm前後のもの(15・16)、14cm前後のもの(17・18・21)、16cm前後のもの(19・20)があり、およそ大中小の3つに分かれる。特に、15・18は手の指をつかって薄くのばし、粘土を極端に少なくし、軽量化をめざしている。

杯B 杯に高台をつけた形態をそなえ、蓋と1組となる。高台は、ほぼ垂直に取りつき、断面形が角張っている。脚端面には、内傾(8)、水平(5)、外傾(7)の3種類があり、内傾のものは凹面をなしている。底部下面是、ほとんどがロクロで削って調整している。高台は欠けているが、口径14.4cm(6)のものもある。

杯Bの蓋 杯Bの蓋は傾部がまるく笠形を呈し、縁部が屈曲しない形態のものがほとんどである。つまみは扁平であって、その上面の中央はわずかに突出している。頂部外面は、削った後になでるもののがほとんどである。口径は15cm前後のもの(1・2・3・4)と、5の杯と組み合う口径17cm前後のものがある。なお、後者は小破片で掲載できなかった。

皿A 広い平らな底部と斜め上にひらく短い口縁部とをそなえる。大きさによって、口径14cm前後のもの(9)、16cm前後のもの(10・11・12)、18cm前後のもの(13・14)とに分けられる。器面の調整は口縁部をロクロなしで、底部のみヘラケズリする。



第9図 S K830出土土器実測図 (1 : 4)

彌A 1個体しか出土していないが、肩がまるく張った器体と大きくひらく口頭部とをそなえた土器である。色調は、淡灰色であり、焼成不良のためか断面は赤褐色である(22)。

土器 彌源がほとんどであり皿が1点出土している。全体に焼成は良好である。

彌A 口縁上部がわずかに外側に突出し、端部が内側にまるく肥厚するものであって、底部をヘラ削りで調整している。なお、略文はいっさい見られない。表面は赤褐色、内面は黄褐色を呈し、焼成はやや軟質。口径21cm(27)。

彌A 口径16cm前後のもの(23・24)、18cm前後のもの(25・31)、26cm前後のもの(26・28・29・30)があり、およそ大中小の三つに分けられる。体部外面と口縁部内面とをハケ目で調整しているものがほとんどであるが、26は内外面ともハケ目で調整している。

昭和60年度出土縁釉陶器 (第10図32~57) 縁釉陶器には、椀、皿、三足盤がある。全体に器面の保存状態は良好ではないが、高台の形態によって、識別可能な4つの群に属するものが多い。そこで、これら4群を第I・II・III・IV群とよびわけ、この順に記述した。

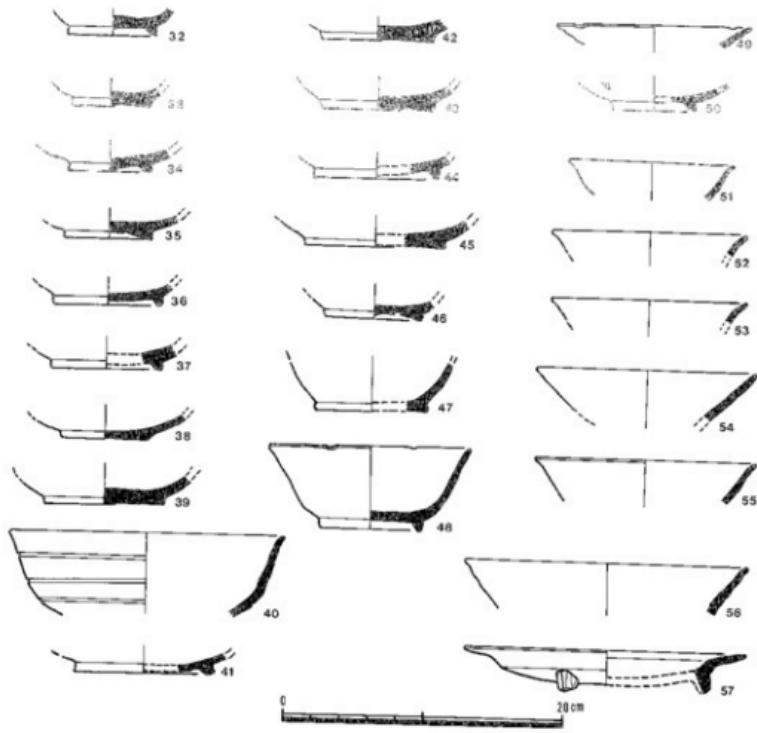
第I群土器は、ロクロから切り離し、ヘラ削りで平滑に仕上げたベタ高台を持つ縁釉陶器である。黄緑を呈する軟陶のものであり、33・38・39・42は裏面にハケで塗った痕跡が明瞭に残る。高台径6cm(38)、8cm(39・42・43・47)、10cm(45)のおよそ大中小3つに分けられる京都洛北産であろうか。

第II群土器(46)は、底部周辺のみを残して内側をけずり込んだ輪高台であり、亀岡篠産と思われる。高台径は7cm前後。

第III群土器(32・50)は、貼り付け高台をもち、端面が内傾し凹面をなす近江系の縁釉陶器である。32は底部裏面に施釉しない。また、50は49と同一個体と見られ輪花皿に復原できる。口径14cm、器高3cmになる。

第IV群土器(34・37・41・44・48)は、第III群以外の貼り付け高台をもつものである。36は淡緑色を呈する非常に硬質のものであり、一見青磁と似ている。高台径8cmであり、底部裏面にミストチン痕が見られる。胎土・焼成から、57の三足盤と同じ産地のものであろう。48はほぼ完形で出土したが、土師質の非常に粗雑な輪花柄である。主に口縁部に縁釉が施釉しており、底部裏面にミストチン痕を残す。口径14.4cm、器高6cm。41は40と同一個体と思われ、口径20cm、器高7cm、高台径10cmに復原できる。他に高台径6cm(34)、8cm(37)、9cm(44)のものが出土している。上記の第III群以外のものでは、口径12cm(51)、14cm(52・53)、16cm(54・55)、20cm(56)の楕が出土しており、56はロクロ目を残している。

木器・金属器 (第10図58~60) 58は白銅製火舎香炉の獸脚。獅子頭であり、歯は門歯4本と太い牙がある。裏面には、香炉本体に取りつけるための接合装置があり、よく似た実例は正倉院にみることができる。59は杓子形木器。片側面のみ内側気味に削って柄に移行する。60は金銅製仏具受皿。礎石掘り形(かさ上げ)から完形で出土した。口径7.5cm。器高1.2cm。



第10図 緑釉陶器・木器・金属器実測図

第5章 まとめ

讃岐国分寺僧房跡SB2Gは、東西18m、南北15mの高床土壇上に並び行行21型（84m）、梁間3間（12m）の東西揺籠石建物である。その南北中軸線は、金堂跡の中心点と現本堂（講堂跡）の中心点とを結ぶ推定伽藍中軸線と完全に一致する。また、現在の仁王門もこの伽藍中軸線上に載っており、奈良時代の創建国分寺の伽藍計画は現存施設にも規制を及ぼしていることが伺える。僧房跡の南北中軸線の方は北で西に約2度振れているが、これは金堂跡の中軸線や、昨年度までの発掘調査で検出した東端築地や鐘楼跡の中軸線の振れと合致する。

僧房跡の礎石は大部分が完存し、柱間寸法は桁行・梁間とともに4m等間となる。さらに特筆すべきことは、礎石の間を結ぶ地盤などの柱間装置が残り、間仕切や房割りに関して具体的な検討が可能な点である。詳細は岡田英男氏による「付論1 讚岐国分寺僧房の復原的考察」に譲り、ここではその結論のみを要約する。讃岐国分寺僧房は桁行中央方3間を食堂的な共同利用空間とし、その東西に桁行3間を単位とする房が各3房（計6房）が連なる。各房は前面1間通りを吹放しもしくは戸間の居住空間として利用し、後方の梁間2間分においては桁行中央間を通路、両脇に方1間の室を各2室（計4室）設け、中央通路から各室に入りするようになっていた。中央通路の前後（正面から第2柱通りと背面柱通り）には唐居敷をもつ扉があった。僧房内部は土間のまま使用し、各室は塗籠風で主に夜間の用に供された。

僧房跡周囲の雨落溝から出土した瓦は奈良時代のものが主体であり、その創建年次を示す。ただし、僧房跡で主体をなすSKM03A-SKH01Aの組み合わせが、讃岐国分寺・国分尼寺の堂塔が整備されていく過程のなかでどの段階に位置づけられるのかは今後の研究課題である。僧房跡では平安時代前期の瓦も多数出土しており、9世紀中頃には東第三房において礎石の据え直しなど大規模な修理工事を行なっている。すなわち、9世紀代には僧房はなおその機能を果し、積極的にその維持がはかられていた。雨落溝からは平安時代中期の軒瓦も若干出土しており、10世紀に至っても一部で瓦の葺き替えを行なっている。しかし、雨落溝から出土する土器は10世紀中頃までのもので、10世紀末～11世紀には僧房はその機能を停止した可能性が強い。特に、調査区東南隅では僧房基礎を切って井戸SE16が掘削されており、この井戸が埋没した13世紀前半以前に僧房が廃墟となっていたことは確実である。また、僧房跡を覆う灰褐色粘質土・暗灰褐色粘質土からは各々12世紀以降・11世紀代の土器が主体的に出土しており、灰褐色粘質土中に主に現本堂で使用したと思われる12世紀以降の瓦が大量に廃棄されている。中世に至って、僧房跡基礎上には冶金関係の炉や焼土ピット、小規模な掘立柱建物が作られるが、これらは現本堂を中心とした中世の国分寺を維持するための付属施設と考えてよかろう。

なお、雨落溝からは今回報告した綠釉陶器以外に、円面碗・猿面碗をはじめとする各種の碗なども多数出土しているが、これらは機会を改めて紹介したい。

付論 1 讀岐国分寺僧房の復原的考察

奈良県立文化財研究所
平城古跡発掘調査委員会

周田英男

讀岐國分寺僧房は講堂の北に建つ東西棟で、桁行21間、梁間3間、柱間は4m等間で天平尺に換算すると13.5尺（天平尺1尺は約29.6cm）、桁行総長は283.5尺、梁間総長は40.5尺の大規模な建物である。礎石の大部分を残すばかりでなく、柱間装置として地覆石・唐居敷座が規則的に残り、間仕切の復原が可能である。この柱間装置は東から第2間、第5間、第8間の後方2間を取り囲むように設けられているが、桁行方向と梁間方向とでは手法に違いがある。梁行方向は、長さ約30~35cm、幅約25cmの凝灰岩切石を2列に並べ、その両端部の切石内角に切り欠きを作る。この切り欠き部に縦材の木口の納が納まったものと考えられる。桁行方向の柱間装置は正面から第2柱通りと背面柱通りとにあり、とくに東から第5間の前方はほぼ完全な状況を残す。それによると、両側の礎石の間に、長さ38cm前後、幅約21~28cmの台形壇を前後3枚づつ、計6枚を總幅南北約80cm、東西約70cmに敷き並べて唐居敷座とする。その間には幅30~35cm、長さ44~48cmの凝灰岩切石を3枚づつ2列に並べている。この凝灰岩切石の上面は博敷（唐居敷座）上面よりも約10cm高く、礎石上面とはほぼ等しい高さである。これらの柱間は桁行方向と梁間方向とで状況が異なるが、凝灰岩切石の磨耗状況などから、いずれも開口部であったと考えられる。

その他の房境や房内部の礎石間には柱間装置が残っていない。部分的には礎石間に1~2個の壇等を置くところもあるが、いずれも姑息的な仕事で、本来のものではない。恐らく、床面上に直接木製の地盤を置いたのであろう。とするならば、柱間装置のない礎石間には、原則として壁構造が想定され、桁行3間を単位とする房が復原できる。すなわち、後方2間の各中央間を通路、両側を室とする房が、東に3房並ぶことになる。

ところが、伽藍中軸線上に当る桁行中央部においては、上述の東から第2間、第5間、第8間とはかなり異なった状況が認められる。中央間の中軸線上には南北方向の溝がある。この溝は幅40cm、底に平瓦を敷き並べ、両側を木の板・丸瓦で護岸しており、建物北側の雨落溝と南側の雨落溝とをつなぎ、建物の内を通って北から南へ排水するようになっている。正面側柱通りでは、この溝の両側に長方形壇を2枚づつ並べ立てて護岸し、背面側柱通りでは、長方形壇を内外2枚置いて溝の蓋としている。溝の南北両端では、底の平瓦の上に壇が倒れており、両端の角では壇を立てて溝の肩を養生したと考えられる。桁行中央間における正面側柱通りの東側礎石の間に、凝灰岩切石と台形壇とが地覆状に並び、背面側柱通りでも東側礎石の間に凝灰岩切石と壇、溝の西の床面上に凝灰岩切石1個が残る。すなわち、桁行中央間は他の房と異なり、正背面の側柱通りに柱間装置がある。したがって、讀岐國分寺僧房の中央部分では、桁行

3間、梁間3間がひとつの部屋となり、前後中央に出入口を設けていたと考えられる。

中央室の正背面中央間にむける柱間装置は凝灰岩切石と博とを混用し、幅70cmほどの地盤を作る。この上に木製の地盤を置いて扉口としたと考えられ、他の扉の出入口のような密閉敷を設けた形跡はない。中央室の正背面両脇間は、床面上に直接木製の地盤を置いて、通子窓あるいは土壁としたと思われる。明り取りを考慮すると、通子窓が適当かと思う。両脇の房との境は各間とも土壁であろう。

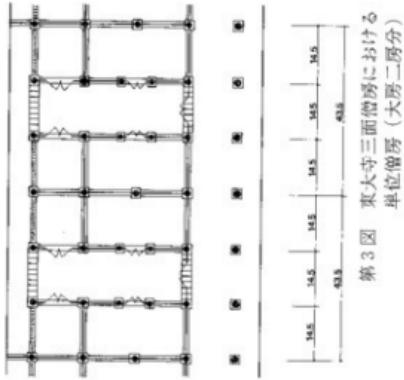
この讃岐国分寺僧房の中央方3間の部屋の性格は明らかでない。平城京の薬師寺では食堂両
(注1)脇に僧房が並び、法隆寺も現講堂の前身が『資財帳』の食堂に当るとすれば同様に復原できる。
鎌倉時代に再建された東大寺戒壇院の北僧房は、古図などによって中央に本来食堂に当る談議
(注2)所があり、その両脇に房が続いている。讃岐国分寺の僧房は全体がひとつの建物の中に納まる
(注3)
(注4)が、中央方3間を食堂に充てていた可能性が特に高いと思われる。

以上の検討によって、讃岐国分寺僧房では中央方3間を食堂的な共同利用空間とし、その東西に桁行3間を単位とする個室群（房）が各3房、計6房が並ぶという全体構造が明らかになった（第1図）。以下、さらに細部の構造に関する復原的考察を深めてみよう。

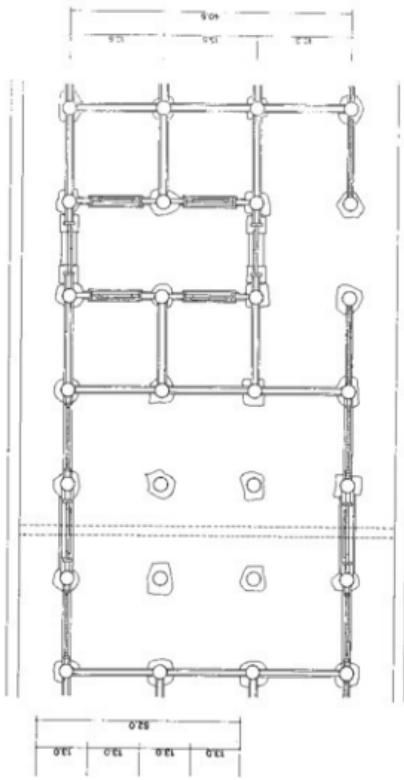
各房は前面の柱間装置が第2列目にあるので、南面1間通りは吹放しであった可能性もある。しかし、中央室は前面に柱間装置があって吹放しとならないので、中央室の梁行前端間も仕切られていたはずである。薬師寺西僧房の大房では、前面1間通りは吹放し状になるが、房境を土壁で区切って各房ごとに使用し、前面側柱通り両脇は通子を立てるなどの簡単な囲いをしていたと考えられる。讃岐国分寺僧房でも同様の区画があり、昼間の居住などに充てられた可能性がある（第2図）。

各房中央間の桁行方向柱間装置は、両脇に博敷の唐居敷座を設けているので、ここに木製の唐居敷を置いて扉を吊り込んでいたことが明らかである。唐居敷は柱に直接取り付くのが一般的であるが、ここでは中間の地覆石の長さが1.40m程度柱間の約3分の1に当り、唐居敷と柱との間があくので、土壁の小脇壁があったと思われる。唐居敷は本來は門に特有の装置であり、車馬の出入りの際に地覆（蹴放）
(注5)を取りはずすことができるようした施設で、仏堂に用いた例はごく少ない。ここに唐居敷を設けたのは、各房ごとの中央間を南北方向の通路として使用したためかもしれない。地覆石を唐居敷よりも高く据えているので、地覆石の上には木製の地覆は置かず、直接蹴放を置いたと考えられる。地覆石上端角はかなり磨滅しているが、中央幅12cm程風化を受けていないところがあり、これが蹴放の幅に当るのであろう。

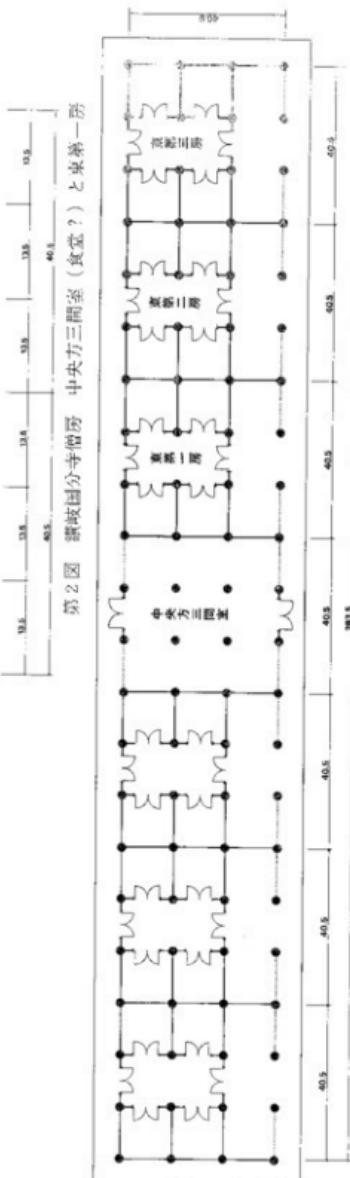
梁行方向の地覆石も両端に縦材をはめたと思われる切り欠きがあるので、ここも各々の室への出入口であったことは明らかである。凝灰岩切石を2列に並べた地覆石の総幅は約50cm、両端の切り欠きの内法は2m前後で柱間寸法の丁度半分になる。地覆石は両角が磨滅するが、上面約40cm幅で風化の少ないところがあり、この上に置いた木製地覆の幅が推定できる。唐居敷



第3圖 東大寺三面僧房における単位僧房(大房二房分)



第3圖 東大寺三面僧房における単位僧房(大房二房分)



第2図 講岐國分寺僧房 中央三間室（食堂？）と出窓一壁

がないので、この本製地盤に風を吊込んだのであろう。地盤石には一方の列を台形埠で代用したところもある、また、礎石際の押出に1個の鷲を設いたところがあるが、礎石の形状に応じて止止めとして入れたのであろう。

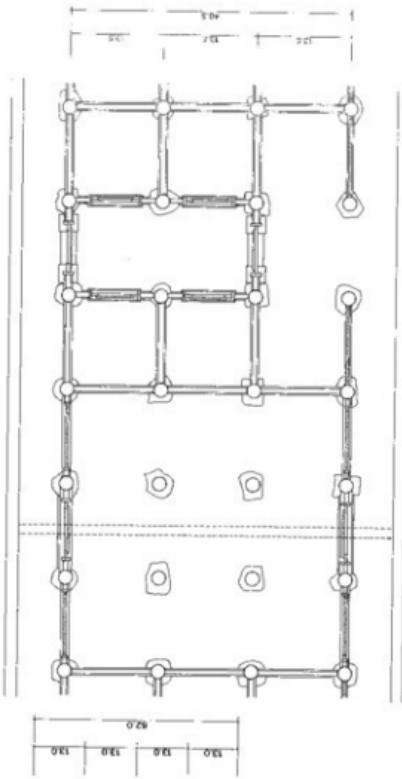
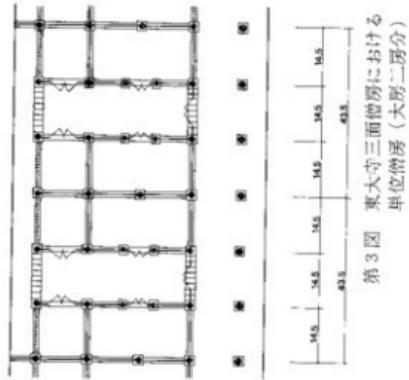
上述した出入口の内側を、それぞれ方1間の調室とし、各房は4重で構成される。その他の柱間には地盤石・埠列はないが、隣房との境と房内の間仕切とは土壁であったと考えられ、各室を主として夜間の用に供したと考えると、正背面扉口の両脇も金龍風に土塀としていたと思われる。遺構の保存状況が極めて良いのに、床束石などはない。したがって、床板を張らず、土間のまま使用したと考えてよい。なお、前面1間通りは各房ごとに吹放しに近い状況で使用したと考えたが、東から第8通りでは梁行前端間の礎石間に埠が置かれている。房によっては前面一間通りの両脇間を適当に開けて使ったところもあるらしい。

讃岐国分寺僧房の梁間は3間である。大房では梁間を4間（2間の身舎の前後に庇付き）とする例が多いが、3間とするものに平城京大安寺大房、同中房、出雲国分寺、武藏国分尼寺、(注6)信濃国分尼寺などがある。大安寺大房は桁行天平尺13.8尺、梁間13尺で讃岐国分寺僧房とほぼ等しく、同様な構造であったと考えられる。古代の僧房としては法隆寺東室（国宝）が現存し、元興寺極樂坊禪室・同本堂（各国宝）の解体修理に際して、前身の元興寺東室南階大房が復原(注7)されている。鎌倉時代のものでは法隆寺西室（国宝）、唐招提寺礼堂（東室、重要文化財）が現存する。

法隆寺東室ではすべて丸柱を用いるが、中間の柱や内部に角柱を用いた例も多く、薬師寺西僧房においても角柱を混用したことが判明している。しかし、讃岐国分寺僧房は柱間が広く、梁間3間なのですべて丸柱と考えた。梁間3間全体に大梁を架け渡したと考えられるが、なお今後の検討を要する。

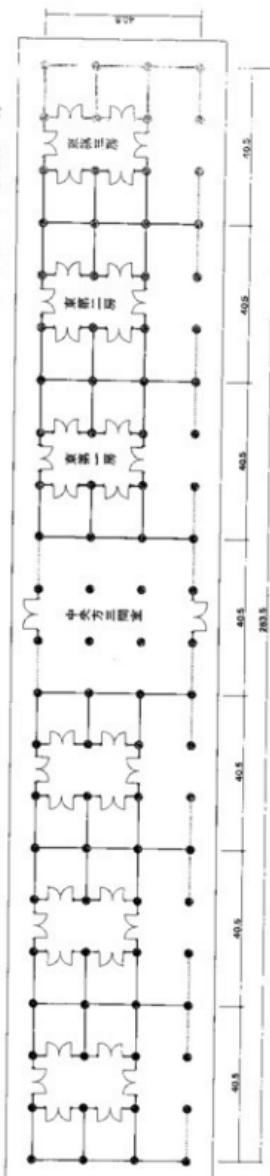
南北側柱通りから南北雨落溝内肩まで各々約2m、東側柱通りから東雨落溝内肩までの距離もほぼ同様である。雨落溝はほとんど素掘りのままであるが、北雨落溝の一部では野面石や平瓦を立てて護岸している。軒の出は7.5尺程で、蟻羽の出も同じ位と考えられる。創建当初の軒瓦はSKM03A-SKH01Aの組み合わせと考えられるが、9世紀中葉の軒瓦の組み合わせSKM05-SKH03も多数出土している。東端の東第三房では一部の礎石を据え直した痕跡がある。すなわち、礎石下に割石や瓦片を嵌め込んで礎石の不同沈下を修整している。その中から9世紀中葉のロクロ土師器碗が出土しており、星根の一部蓋替えもこの礎石の据え直しと併行して行なわれた可能性が強い。

古代の僧房には桁行2間を1房とするものと、3間を1房とするものとがあり、法隆寺東室では2間1房、川原寺僧房では3間1房と2間1房とをセットとする。讃岐国分寺僧房と同じ3間1房の好例に東大寺と元興寺がある。いずれも梁間4間であるが、東大寺大房では前面1間通りを吹放しの通路、後方の方3間を房とし、房の中央を通路、両脇を2間と1間の室に



- 23 -

第2図 講岐園分寺僧房 中央方三間室（食堂？）と東第一房



第1図 講岐園分寺僧房の全体復原平面図（数字は天平尺）

がないので、この木製地盤に埠を吊込んだのであろう。地覆石には一方の列を台形埠で代用したところもある。また、礎石際の柱筋に1個の埠を置いたところがあるが、礎石の形状に応じて埠止めとして入れたのであろう。

上述した出入口の内側を、それぞれ方1間の個室とし、各房は4室で構成される。その他の柱間には地覆石・埠列はないが、隣房との境と房内の間仕切とは土壁であったと考えられ、各室を主として夜間の用に供したと考えると、正面背面扉口の両脇も塗籠風に上塗としていたと思われる。遺構の保存状況が極めて良いのに、床束石などはない。したがって、床板を張らず、土間のまま使用したと考えてよい。なお、前面1間通りは各房ごとに吹放しに近い状況で使用したと考えたが、東から第8通りでは梁行前端間の礎石際に埠が置かれている。房によっては前面一間通りの両脇間を適当に開いて使ったところもあるらしい。

讃岐国分寺僧房の梁間は3間である。大房では梁間を4間（2間の身舎の前後に庇付き）とする例が多いが、3間とするものに平城京大安寺大房、同中房、出雲国分寺、武藏国分尼寺、^(注6)信濃國分尼寺などがある。大安寺大房は桁行天平尺13.8尺、梁間13尺で讃岐国分寺僧房とほぼ等しく、同様な構造であったと考えられる。古代の僧房としては法隆寺東室（国宝）が現存し、元興寺極楽坊禪室・同本堂（各国宝）の解体修理に際して、前身の元興寺東室南階大房が復原^(注7)されている。鎌倉時代のものでは法隆寺西室（国宝）、唐招提寺礼堂（東室、重要文化財）が現存する。

法隆寺東室ではすべて丸柱を用いるが、中間の柱や内部に角柱を用いた例も多く、薬師寺西僧房においても角柱を混用したことが判明している。しかし、讃岐国分寺僧房は柱間が広く、梁間3間なのですべて丸柱と考えた。梁間3間全体に大梁を架け渡したと考えられるが、なお今後の検討を要する。

南北隅柱通りから南北雨落溝内肩まで各々約2m、東側柱通りから東雨落溝内肩までの距離もほぼ同様である。雨落溝はほとんど素掘りのままであるが、北雨落溝の一部では野面石や平瓦を立てて護岸している。軒の出は7.5尺程度で、蟻羽の出も同じ位と考えられる。創建当初の軒瓦はSKM03A-SKH01Aの組み合わせと考えられるが、9世紀中葉の軒瓦の組み合わせSKM05-SKH03も多数出土している。東端の東第三房では一部の礎石を据え直した痕跡がある。すなわち、礎石下に割石や瓦片を嵌い込んで礎石の不同沈下を修整している。その中から9世紀中葉のロクロ土器器碗が出土しており、屋根の一部葺替えもこの礎石の据え直しと併行して行なわれた可能性が強い。

古代の僧房には桁行2間を1房とするものと、3間を1房とするものとがあり、法隆寺東室では2間1房、川原寺僧房では3間1房と2間1房とをセットとする。讃岐国分寺僧房と同じ3間1房の好例に東大寺と元興寺とがある。いずれも梁間4間であるが、東大寺大房では前面1間通りを吹放しの通路、後方の方3間を房とし、房の中央を通路、両脇を2間と1間の室に

分け、中央通路から各室に入りするように復原されており（第3図）。讃岐国分寺僧房とよく似た構成をもつ。また、東大寺戒壇院北側房も桁行3間を1房とし、梁間4間のうち前面1間通りを吹放し、後方の方3間の桁行中央間を通路、両端に方1間の室を各3室設けており、やはり同様の構成であった。大安寺大房の房割りは判明していないが、桁行3間を1房とすると、讃岐国分寺僧房とよく似た構成であったことになる。

僧房の発掘調査例は各地の国分寺・国分尼寺をはじめとして数多く、柱間寸法やおよその規模が判明した例も少なくない。しかし、房割りの詳細まで判明した例はきわめて稀である。讃岐国分寺僧房跡の発掘調査は、その規模、間仕切、房割りまで解明した点で、今後の古代寺院の研究に重要な資料を提供したことになる。

僧房は大房だけではなく、小子房や付属屋と組み合う場合が少なくない。讃岐国分寺僧房も各房の桁行中央間を通路とするので、北側に小子房をともなう可能性も考えられるが、これは今後の発掘調査の進展によって明らかとなるであろう。

- 注1 宮本長二郎・川越俊一・高瀬要「平城宮跡と平城京跡の発掘調査」『奈良国立文化財研究所年報』1975年
土肥幸・安田龍太郎「平城宮跡と平城京跡の調査」『奈良国立文化財研究所年報』1978年
- 2 法隆寺「法隆寺奇跡災厄施救工事・発掘調査報告書」1985年
- 3 浅野清・鈴木嘉吉「奈良時代僧房の研究——元興寺僧房の復原を中心として——」『奈良国立文化財研究所学報』第4号、1957年
- 4 田代博太郎「伽藍」『奈良六大寺大觀』第9巻、東大寺1、1970年（岩波書店）
- 5 常陸國分尼寺の僧房は桁行9間を3庖に仕切り、中央は馬道的な部屋。両端は前庭を付けて房とし、両間に棟通りを備えて別棟の小建物が並ぶ特殊な構成である。あるいは、中央3間の部屋は讃岐國分寺の場合と同様に「食堂的空間」と考えられるかもしれない（石岡市教育委員会「常陸國分尼寺地調査報告（第1次調査）」1970年。三輪高六「常陸國分尼寺」『仏教藝術』103号、1975年）。
- 6 新崇歸寺本堂（国宝、奈良時代末、奈良市）は壁口に房割敷を設ける特殊な例であるが、建立当初以来の手法かどうか明らかでない。
- 7 川原寺では梁間3間の房の前面に梁間の広い通廊状の庇庇が付く（『川原寺発掘調査報告』奈良国立文化財研究所第9号、1960年）。
- 8 浅野清・鈴木嘉吉「奈良時代僧房の研究——元興寺僧房の復原を中心として——」（前掲）

付論 2 講岐国分寺僧房跡礎石の地質面からの観察

香川大学農学部農業工学科 教授 西藤 実
助教授 梶原司

調査の概況 講岐国分寺跡史跡整備に伴なう第3次発掘調査は、国分寺町教育委員会を発掘調査主体として昭和60年6月から行なわれており、本報告は、この建物跡に配置されている礎石の地質に関する調査の結果である。

造構の説明に際し、教育委員会の概要説明では、各柱礎石間を西から中央間・東1間・東2間～東10間と呼称しているので、柱礎石の位置表示も西側を始点として第3表のように番号を付け、北西隅の柱礎石を1-1、と命名し順次1-10、1-18、とし南東隅の柱礎石を12-ニとした。

調査は各柱礎石について外見を観察し、尚かつ判断できないものについては近辺に散在する同種と思われる岩石を碎いて調べ、礎石自体を損なわないよう配慮し判断した。また柱礎石間に布設されている長方体に切り出された加工されている石材についても同様の配慮をして、使用されている岩石の地質面からの検討を行なった。

結果として本遺構に使用されている岩石は、自然石・加工石とともに、本遺構発掘調査地の北方に近接して存在する五色台連峰を構成している1100万年から2500万年以前の新生代・第三紀・中新世に生成された火山性堆積物である角閃石安山岩・古銅輝石安山岩・流紋岩・凝灰角礫岩などの讃岐層群類の岩石を母岩とするものであることが判明した。

以下これらの地質区分判定の背景となる讃岐層群岩石の地質特性について述べ、各柱下に用いられた礎石の岩石区分を行なった結果を示した。

国分寺町付近の地質特性 本調査

地質時代	地層・岩石名	地層・岩石の種類	固結度
第四紀 冲積帯	新潟河川堆積物	砂・砂	未固結
	河川氾濫堆積物	泥・砂・泥	
	湖状地盤堆積物	泥・砂・泥	
	堆積堆積物	砂屑物	
洪積帯	低位侵蝕堆積物	粘土・砂・砾	半固結
	高位侵蝕堆積物	粘土・砂・砾	
	三笠層群	アルコース砂遷・泥遷	
第三紀 中新世	讃岐層群	角閃石安山岩・古銅輝石安山岩・流紋岩・凝灰角礫岩	固結
	(高鍋火山岩類)		
中生代 後期 (白堊紀-)	斑岩・侵岩類	石英斑岩・花崗斑岩・砂岩・变質綠岩	固結
	領家花崗岩類	麻粒岩花崗岩・角閃石基性花崗岩・花崗斑岩・閃綠岩	
古生代 後期	領家安山岩類	雲母片岩・ホルンフェルス・片麻岩	

第1表 地層および岩石一覧

地のある国分寺町地域の基盤を構成する地層は花崗岩系で、種類は、広く瀬戸内地方に分布している領家花崗岩類に属し、古生層に熱変成作用を及ぼして中生代初期位（2億3千万年位以前）までに生成された比較的粗粒系の黒雲母花崗岩ないし花崗岩ないし花崗閃綠岩である。

この基盤の花崗岩の浸食された面上に、基盤岩の塊片や水蝕作用を受けた礫塊を混入した凝灰質物（凝灰

角礫岩・黒雲母安山岩質凝灰岩など)が堆積し、その上位に角閃石安山岩ないし斜方輝石安山岩を含む30~50m程度の集塊岩層がある。その上位には、約50~60mの花崗岩の基盤を貫いて噴出した火山岩である古銅輝石安山岩溶岩および讃岐岩溶岩が約30mの厚さであり、台地状の地形を形成している。これらの噴出した古銅輝石安山岩などの火山岩および、それらの火山活動に伴い生成された凝灰岩ないし凝灰角礫岩系の地層や集塊岩層を讃岐層群と称しており、生成は新生代・第三紀の中新生世(1100万年~2500万年以前)とされているもので、本遺構発掘調査地の北方に接する五色台連峰の地層を構成している。この地質構成の様式的露出地が、国分寺町鍋岡の東奥地区から国分台山頂へ通じる道路の側面にあり、この地域がこのような地質構造の代表的な表われかたをしていることが知られている(第1表・第2表参照)。

国分台の南側の山麓には、これらの岩石の風化によって生産された土砂が重力および水力で運搬されて出来た段丘堆積物の洪積世の地盤が形成されている。この地層の分布域は山麓から旧国道11号線・予讃本線を越え開ノ池附近にまで及んでいる(第1図)。

前節の概況の項および次節での各礫石の観察結果からも明らかのように本調査地で用いられている礫石は割り石でなく自然石をそのまま使用しており、しかも岩の表面は主として水の營力によって磨耗されたと考えられる円磨された滑めらかさを有しているものが多いことから、大部分の礫石は国分寺建立にあたって行なわれた整地工事に伴って出土した形姿のよい岩塊を選んで使ったか、また、他地区から搬入したとしても極めて近傍から調達したものと考えてよいと推察される。44×30×10cmの寸法に綺麗に加工された純白で均質微細粒子で構成された酸性の石英粗面岩(流紋岩)質安山岩質凝灰岩も近接する国分台山の南麓部の露頭に存在することから、これも近隣に石切場があって生産加工されたものと推察される。

国分寺町近辺地層産岩質の性状 新生代・第三紀

中新世の後期に阿讃山地の北側に浅い水深の花崗岩類(黒雲母花崗岩・花崗閃綠岩)の浸食面上に、北方に開く放射状の亀裂が出来て酸性凝灰岩(黒雲母安山岩質凝灰岩・凝灰角礫岩など)にはじまり讃岐岩質安山岩、讃岐岩の溶岩が湧出し、最終はこれらの地層を切る流紋岩(石英粗面岩)質岩脈に貫かれ堆積した地層が形成された。これらの火山性堆積層を讃岐層群と呼んでいる。地盤はこの火山活動による火山噴出物を堆積しながら次第に沈降し、上位にある讃岐岩も水面に近い地点で浸食作用を受けている。以後、水面が後退し、陸上で浸食時期になり隆起した地層は開析された溶岩台地の地形が形成された。讃岐層群は花崗岩類

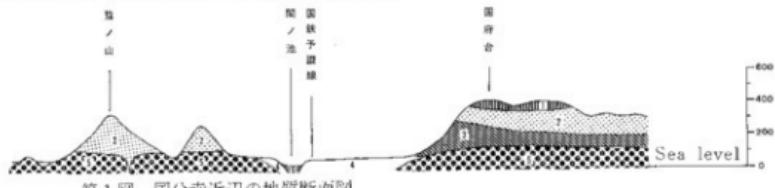
地質時代	絶対年 (100万年)	地層の厚さ (m)
新生代	更新世	1 6
	新新世	10 15
	中新世	14 21
	中中新世	15 26
	中新世	30 68
	始新世	20 50
中生代	始新世	10 95
	古新世	2 12
	白堊紀	65 110
	ジュラ紀	5 44
	三疊紀	180±5 30 205
古生代	二疊紀	225±5 30 255
	石炭紀	270±5 45 19 254
	デボン紀	350±10 60 46 300
	シルル紀	400±10 50 38 338
	カルドリス紀	440±10 40 34 372
	カンブリア紀	500±15 40 40 412

(ARTHUR HOLMES, 1959)

第2表 地質時代と絶対年との関係

よりも風化浸食に強く、讃岐層群を蓋せた部分が削り残された花崗岩類が卓越した部分は高度をより低下する現象が進み国分台を含む五色台邊縁の溶岩台地の山地から南の方へ流れる形で砂礫を供給していたものが多かったと思われ、本調査地の場所も五色台邊縁からの堆積物で形成された扇状地堆積物の段丘上にあると推察される。本地区近辺に見られる讃岐層群を主体とする岩石類の性状は以下の通りである。

- A. 花崗岩類 a. 黒雲母花崗岩、白色ないし灰色が一般的で、中粒ないし粗粒の組織で一般に硬い領家花崗岩類に属する。b. 花崗閃綠岩、一般に粗粒で灰白色で、黒雲母花崗岩に比較して角閃石を含む割合が多く、深層風化する性質があり、その風化物を“マサ”と呼んでいる。
- B. 讃岐岩類 a. 讃岐岩、讃岐の磐石（けいせき）とか金石（かないし）の俗称で呼ばれている古銅輝石安山岩の玻璃質種のもので、割ると貝殻状の断面を示す黒色で緻密な石肌の岩石であり、金屬片などで叩くと美音を発するので合図・聽用に、またガラス質の黒色を生かして置物・硯石などに用いられる。風化すると表面が白色になり、木目のような溝状の筋が生じるので“縁とり石”と呼ばれ庭石に供される。香川県特産で国分台地区の白峰・青峰・西山および坂出の城山・金山の頂部にあって讃岐岩質安山岩（古銅輝石安山岩）を被覆して分布している。
- b. 讃岐岩質安山岩 国分台地区においては讃岐岩溶岩の下位に分布するもので、讃岐岩類の内で最も分布域が広く、屋島・津田北山・豊島・城山・大麻山・七宝山などに見られる。讃岐岩に比較して、長石類を多く保有していることで、斜方輝石（古銅輝石）および单斜輝石も含んでおり古銅輝石安山岩とも呼ばれる。讃岐岩と同様に節理とくに板状節理が著しく、表面が灰白色の疊石状の岩塊へと風化が進む。また、土壤化したものは赤褐色の粘土状になりボーキサイトに類似した風化残積土になる。
- C. 凝灰石礫岩・凝灰岩、基盤の花崗岩類の浸食面上に堆積するもので、上位は角閃石安山岩、黒雲母安山岩、黒雲母石英安山岩などの裂片を混じえ、中位は成層した凝灰岩で、下位は基盤岩の花崗岩類の塊片および最大径1mに達する巨大な木触礫を混入し、基底礫岩状を呈している。国分寺町端岡の東奥地区から国分台山頂に通じる道路の崖に標式的露出地があるが、これより西部のものは角理質状を呈し、東部では純白の均質微細の凝灰岩となっている。部分的には、珪化木や植物化石の破片を含むものもある。



第1図 国分寺近辺の地質断面図
1.讃岐岩 2.角閃石安山岩 3.讃岐岩質安山岩 4.段丘洪積堆積地 5.花崗岩 6.水面または沖積地

D. 流紋岩(石英韌面岩), この讃岐岩類中には基盤の花崗岩類を貫ぬき漂出した流紋岩質岩層が網目状に発達している。原石は白色ないし灰青色で、模様端頭を貫ぬく所では赤褐色ないしクリーム色に変化している。一般には底面に乏しく、玻璃質で節理が多く見られる。

讃岐國分寺僧房跡の岩質の判定
讃岐國分寺の僧房跡とされている地区で現在発掘された区域(建物跡の中央より東側になる部分)には東西方向に12個、南北方向に4個の12×4=48個の柱木の礎石が置かれていたと考えられる跡地が相互に4mの等間隔の正方形配置で存在する。各礎石の岩質区分については第3表に、形状についてはPL. 14・15・16に示した。

これらのうち加工された石材は全て基盤の花崗岩類上に堆積した成層の凝灰岩で、水中おそらく湖沼性の堆積物で、黒雲母安山岩質の層理および偽層がよく発達した純白で均質微細なものでの岩質が軟らかく加工が容易な岩石とされているものである。

礎石として使用されていたと考えられる44個については、第3表で示したように花崗岩類が1個、集塊岩(安山岩質)が2個、讃岐岩が12個、讃岐岩質安山岩が29個とほとんどが輝石安山岩系の岩石で讃岐層群と呼ばれている地質に区分されるものである。これらは硬質で板状節理が発達し、磐石状になった岩塊は砕石や礎石に適した形状をしている。礎石として使用されている平らな円板状の岩塊の表面は、ほとんどのものが水の力で受けたと思われる円磨作用を受けていることから、石切場などで切り出され整形したものではなく、運積された堆積層中より採取されたものと推察

される。本地區の北側に近接する国分台地区的地層の構成や国分寺近辺の地形状況からみてこれらの岩石の供給源は五色台連峰であり、柱用の礎石はこれらの風化物が運積されることで作られた自然岩塊が主として使われ、長方形に加工された岩塊は近くの国分台の南麓部に露出する地点から切り出されたものが、使われた可能性が高いと推察される。

あとがき 本僧房跡礎

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
イ	讃岐岩質安山岩	讃岐岩質集塊岩	安山岩質集塊岩		讃岐岩質安山岩	讃岐岩質安山岩	讃岐岩質安山岩	讃岐岩質安山岩	讃岐岩質安山岩	讃岐岩質安山岩	讃岐岩質安山岩	讃岐岩質安山岩
ロ	安山岩質集塊岩	讃岐岩	讃岐岩	讃岐岩質安山岩	讃岐岩質安山岩	讃岐岩質安山岩	讃岐岩質安山岩	讃岐岩質安山岩	讃岐岩質安山岩	讃岐岩質安山岩	讃岐岩質安山岩	讃岐岩質安山岩
ハ	讃岐岩質安山岩	讃岐岩	讃岐岩	讃岐岩	角閃石黑雲母花崗岩	讃岐岩質安山岩						
ニ	讃岐岩質安山岩	讃岐岩質安山岩	讃岐岩質安山岩	讃岐岩質安山岩	讃岐岩質安山岩	讃岐岩質安山岩	讃岐岩質安山岩	讃岐岩質安山岩	讃岐岩質安山岩	讃岐岩質安山岩	讃岐岩質安山岩	讃岐岩質安山岩

第3表 讃岐國分寺僧房跡礎石の岩質区分

石の地質的側面からの調査は、凝灰岩類系の岩石の風化防止および遺跡の保全などの意味で短期間の無理後程め集めた関係で、時間的な制約と共に岩手の破壊面を出して新鮮な面を出して検討することができず、外部からの観察を主体とした表面的なものにならため、概略的な調査になってしまい、とくに、讃岐岩と讃岐岩質安山岩の区分については問題が残ったと反省している。しかし、本来両者の区分は明瞭ではなく、讃岐岩質安山岩の岩質も幅があるし、すべて同じ国分台山地から供給されたものとすれば、その変化も段階的と考えられることから区分は一層難しいので、比較的讃岐岩的であるとか、比較的讃岐岩質安山岩的特性がある位の意味で受け取って下さればと思っている。

いずれにしても、今回の発掘地だけでも50個に近い多数の礎石が、すべて同じ様な岩質で形状も揃っており、使用目的には惜しいような自然力で形成された美形の岩塊であることにつきは注目される事柄と思われ、本報告の結果に今後の発掘調査での結果や現国分寺に存在する礎石類も含めての検討の進行は土木材料・土木施工面からも興味ある問題であるを感じた。

参考文献

- 吉森実・坂東祐司・馬場泰秋・森合重仁編『香川県地質図・香川県地質図説明書』P. 1~75, 1962年(株・内場地下工業)
経済企画庁統合開発局上調査課編「表層地質概説・表層地質編図」「土地分類基本調査丸亀」P. 1~15, 1969年
(経済企画庁)
高桑弘『香川県の自然と災害』P. 65~86, P. 95~99, 1976年(株・瀬戸内出版)
柴田秀賀編『日本岩石誌』III, 火山岩, P. 156~159, 1968年(朝倉書店)

図 版



(1) 調査区全景（西から）



(2) 調査区全景（北から）



(3) 調査区全景（東から）



(4) 僧房跡 東 第一房 (北から)



(5) 僧房跡 東 第二房 (北から)



(6) 僧房跡 東 第三房 (北から)

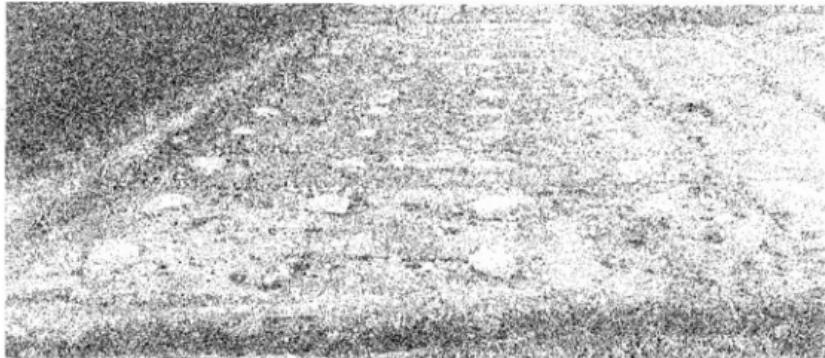
図 版



(1) 調査区全景 (西から)



(2) 調査区全景 (北から)



(3) 調査区全景 (東から)



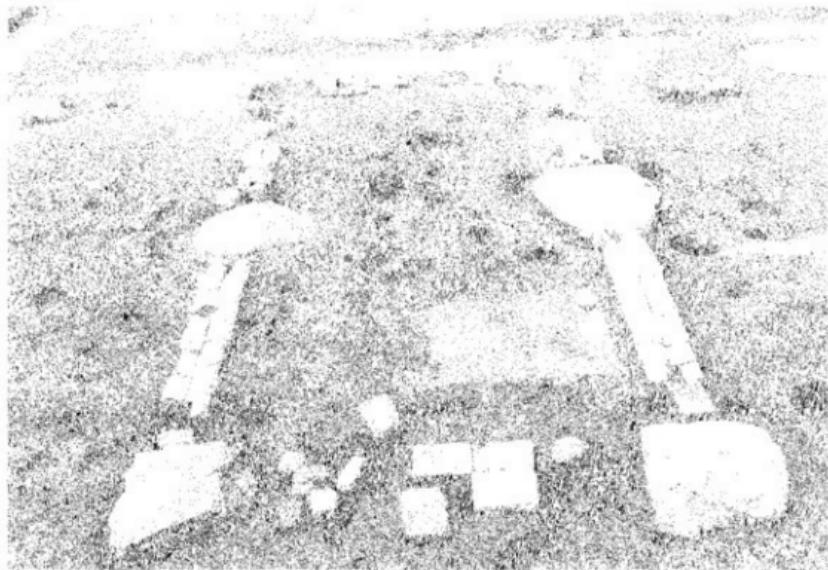
(4) 僧房跡 東 第一房 (北から)



(5) 僧房跡 東 第二房 (北から)



(6) 僧房跡 東 第三房 (北から)



(7) 僧房跡 東 3間 (南から)



(8) 僧房跡 東 6間 (南から)



(9) 中央間の南北溝（南から）



(10) 中央間の南北溝（北から）



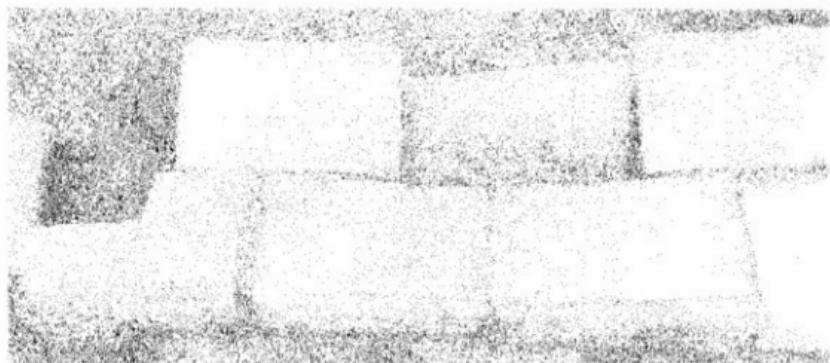
(II) 東 9 間北側雨落溝の基壇化粧（北から）



(II) 東 3・4 間北側雨落溝の基壇化粧（南東から）



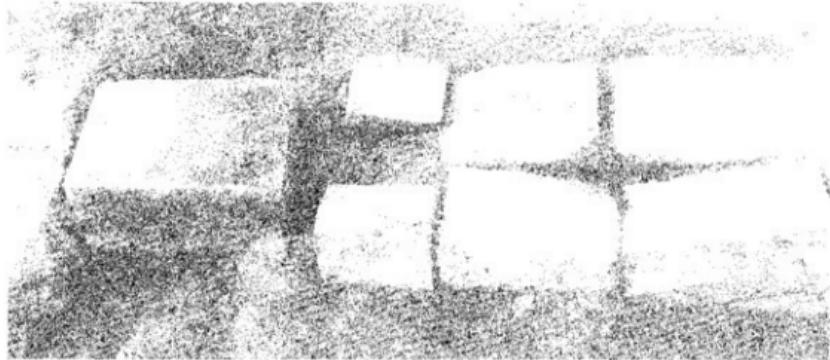
(II) 東 3・4 間北側雨落溝の基壇化粧（北西から）



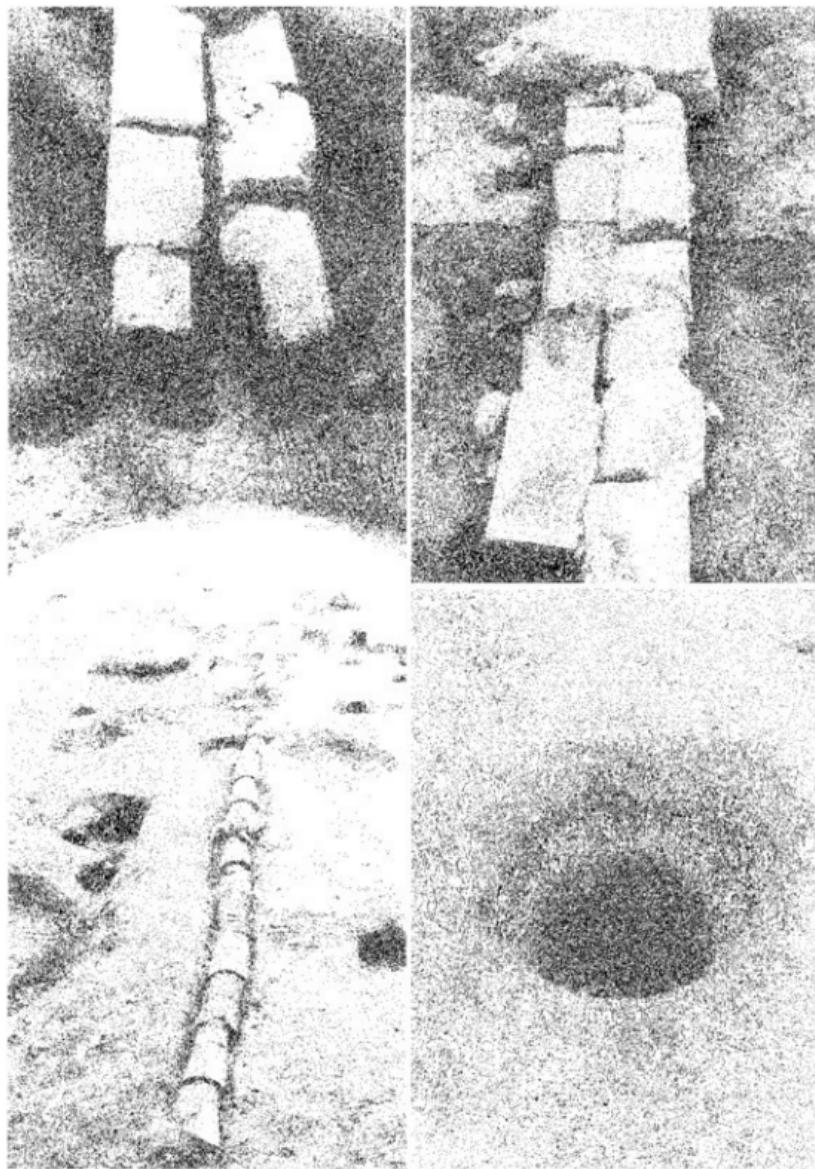
(14)木製地覆痕の残る切石(4一ハ礎石付近・東から)



(15)軒平と塙を使った地覆(6一口礎石付近・東から)



(16)切り欠きを持つ地覆(5一ハ礎石付近・東から)



(ⅰ)切り欠きを持つ地覆(5一口横石付近・北から) (ⅱ)台形堀を転用した地覆(10一口ハ横石間・南から)

(ⅲ)畦渠(東6間・南から)

(ⅳ)S E 16(調査区南東隅・北から)

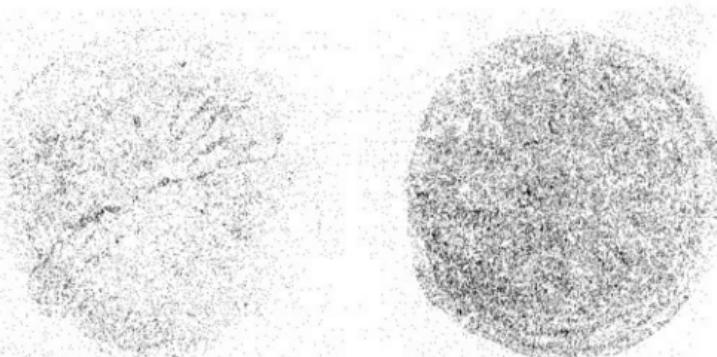


SKM03A
SKH01A



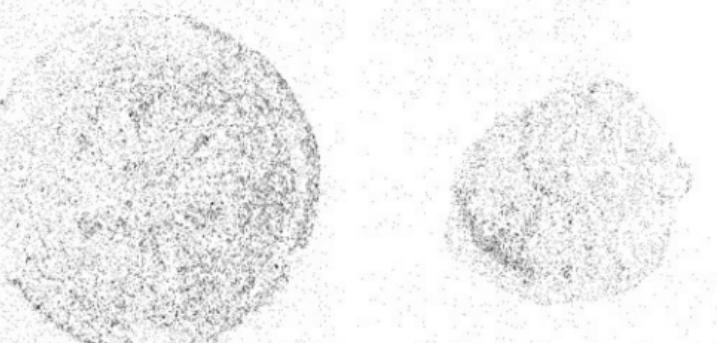
SKM07
SKH05A

僧房跡における主要な軒瓦の組合せ



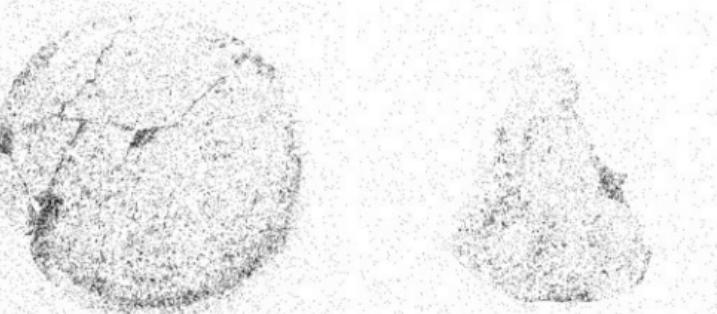
SKM14

SKM19



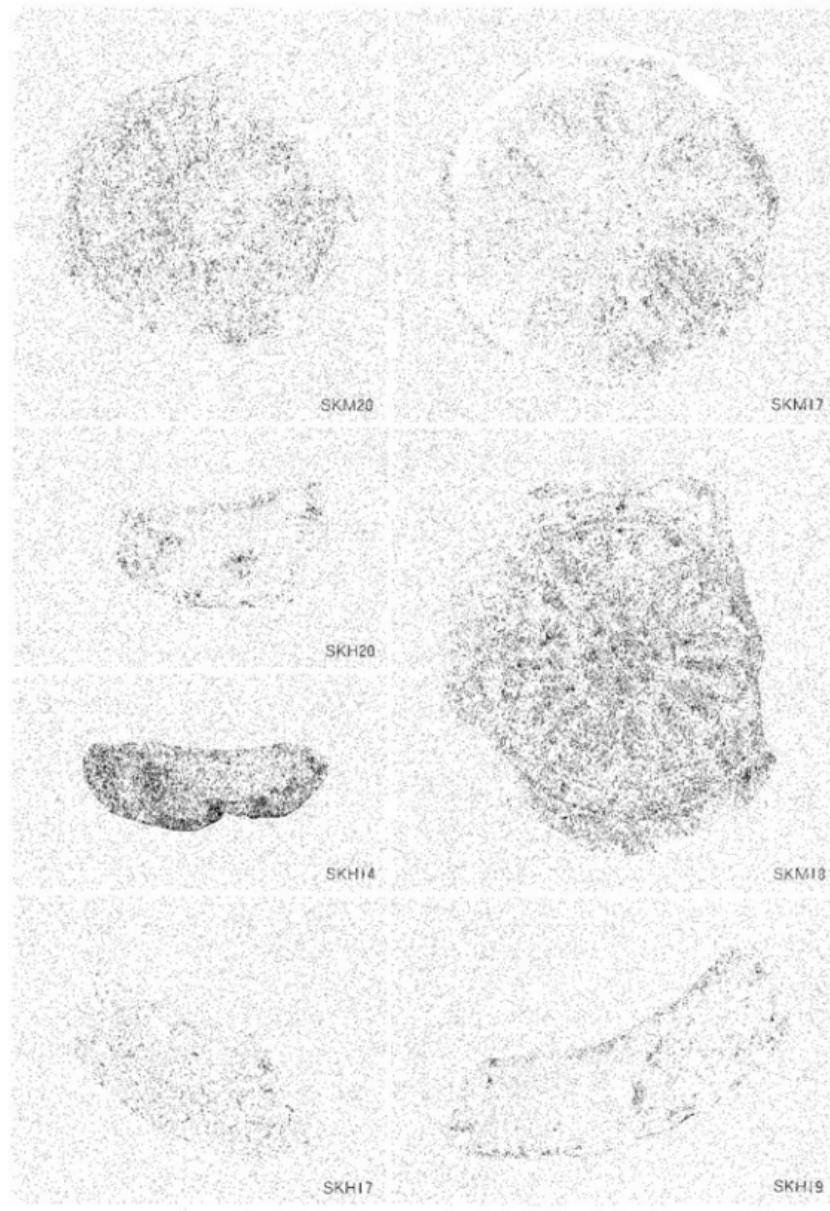
SKM15

SKM21



SKM16

SKM22

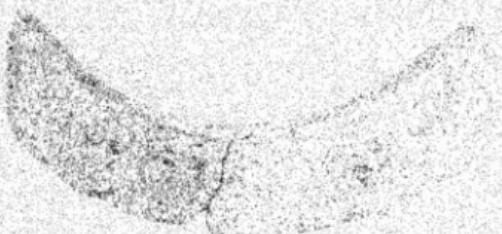




SKH16



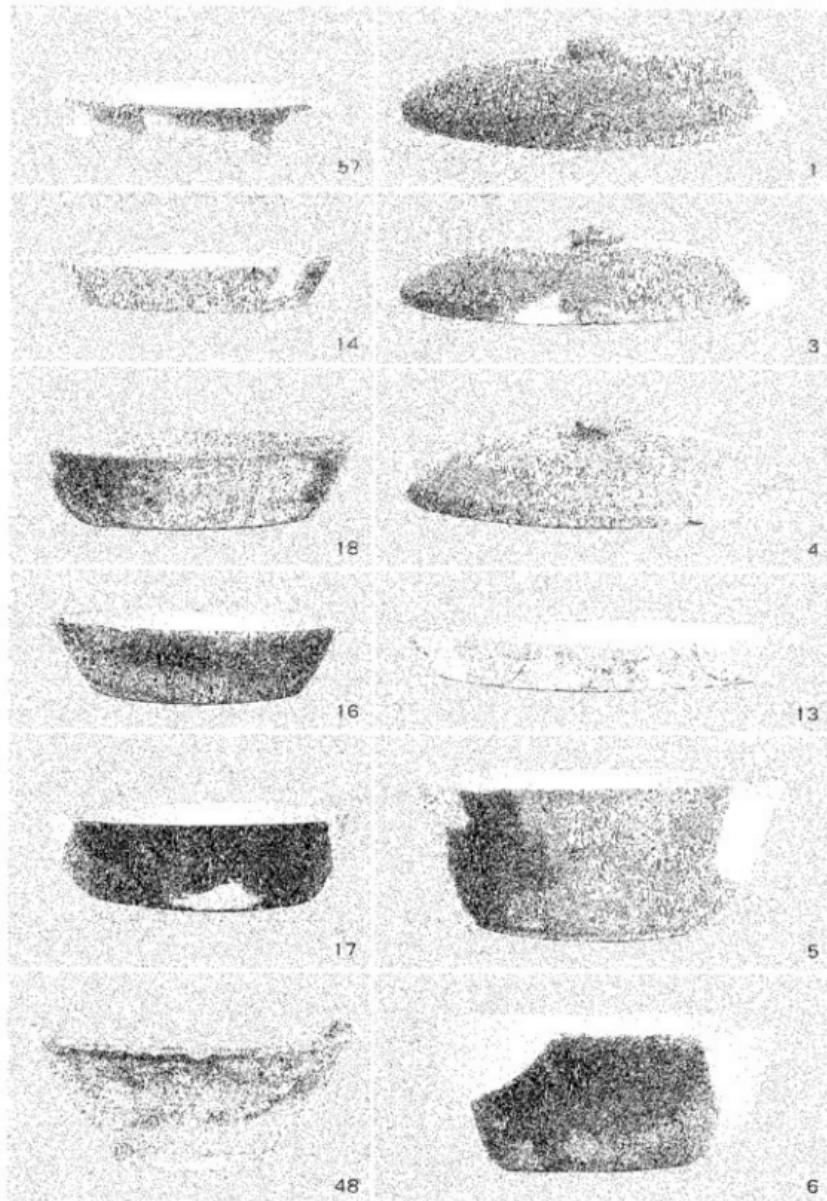
SKH18

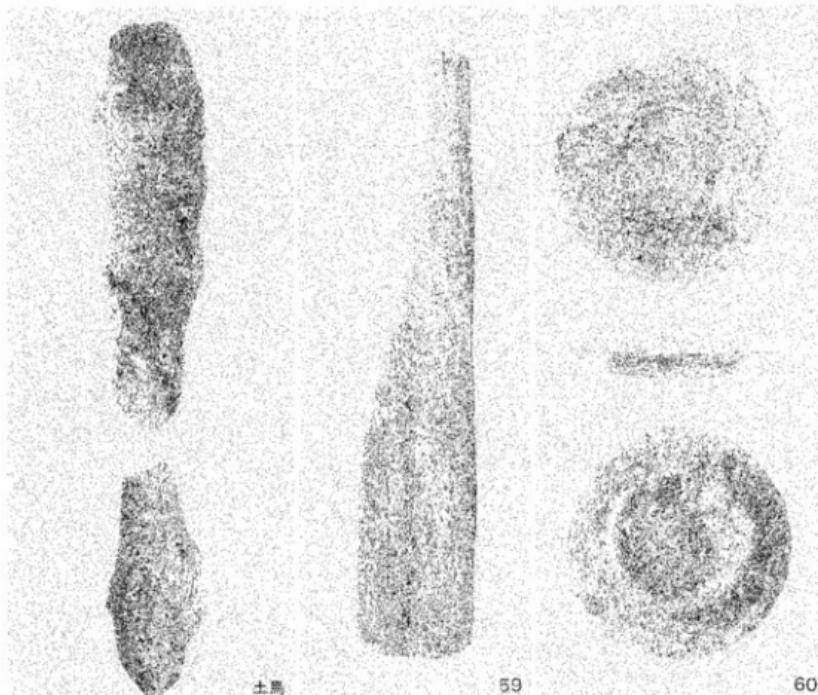


SKH13



SKH15

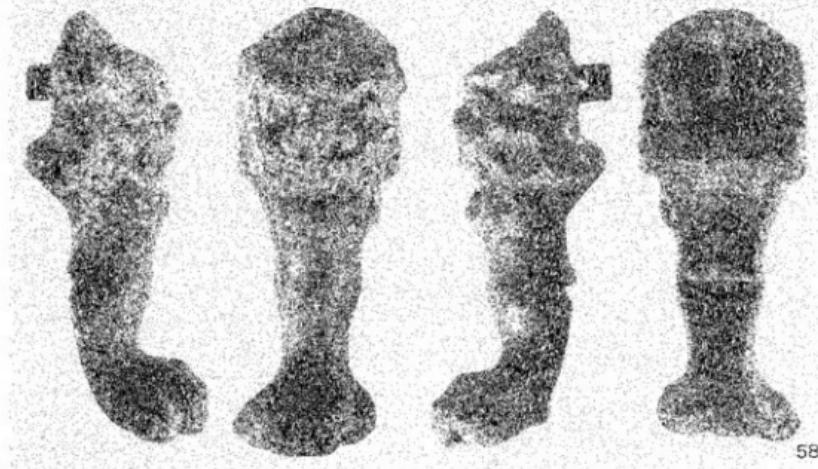




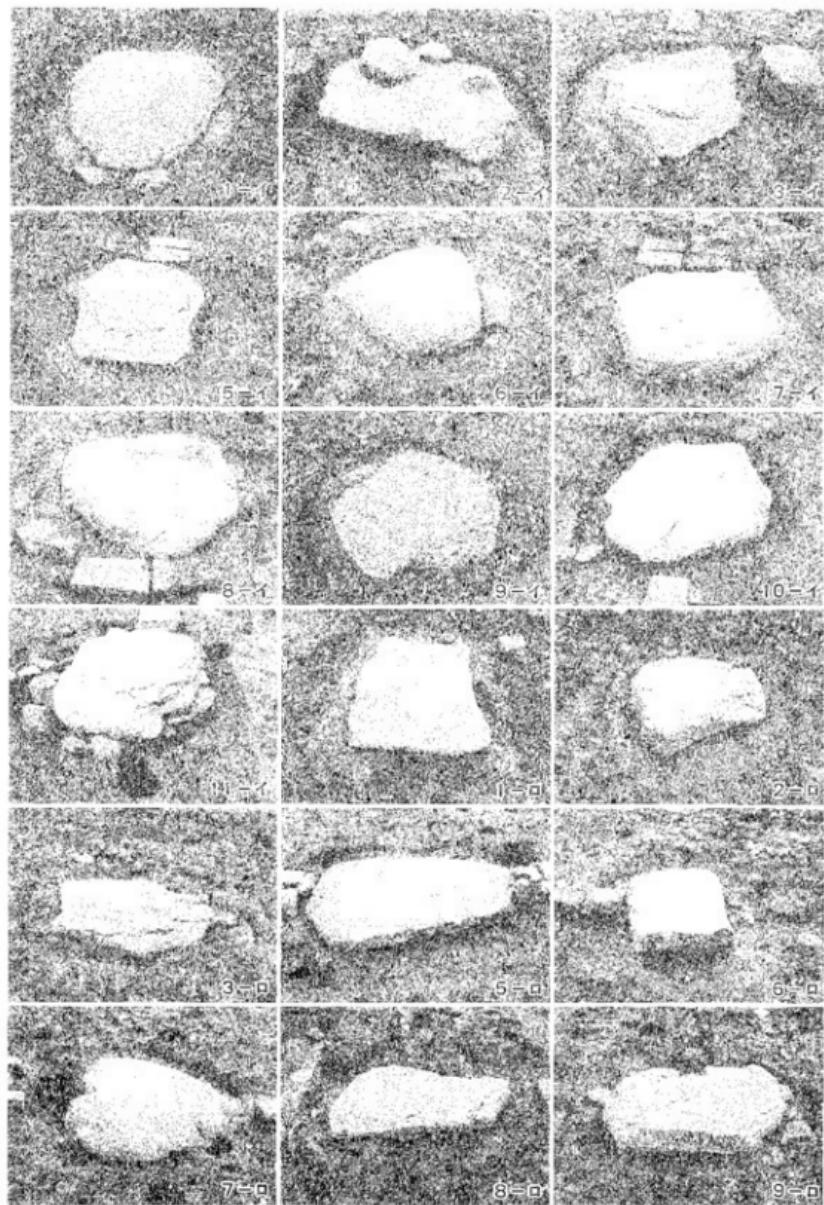
土馬

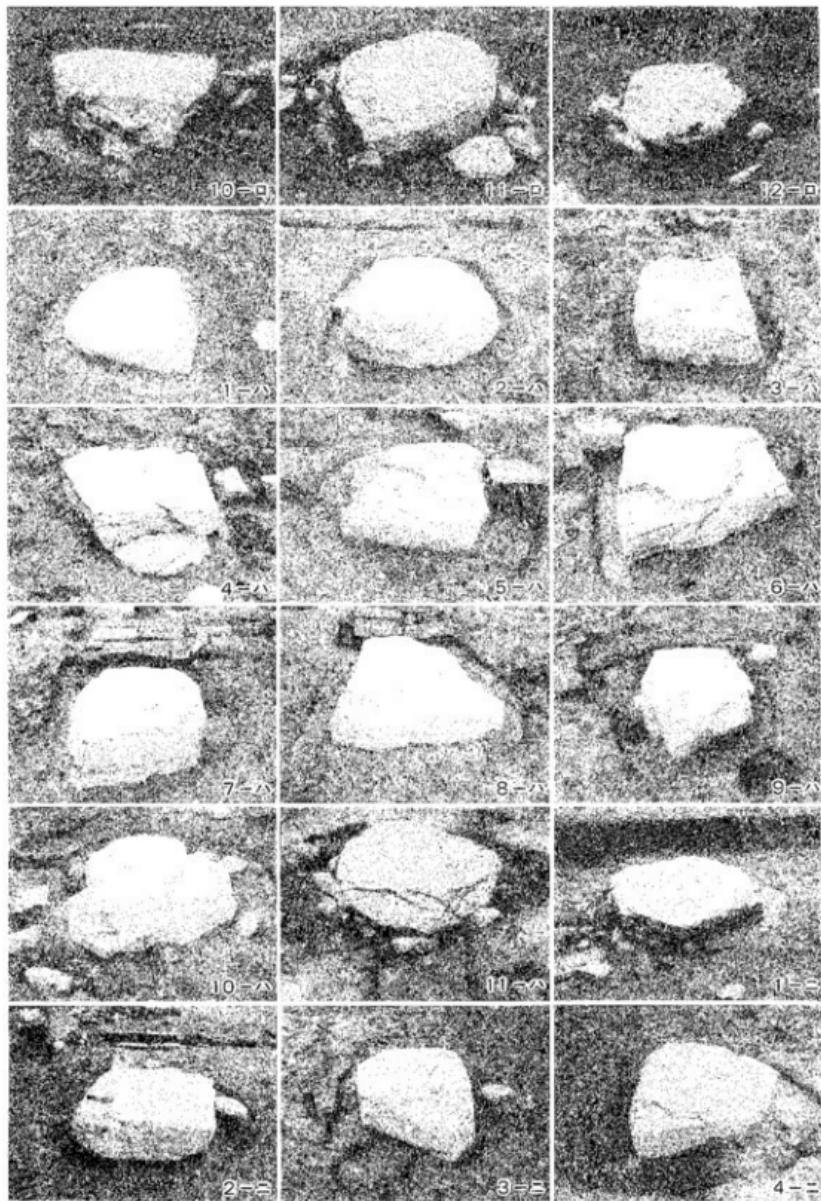
59

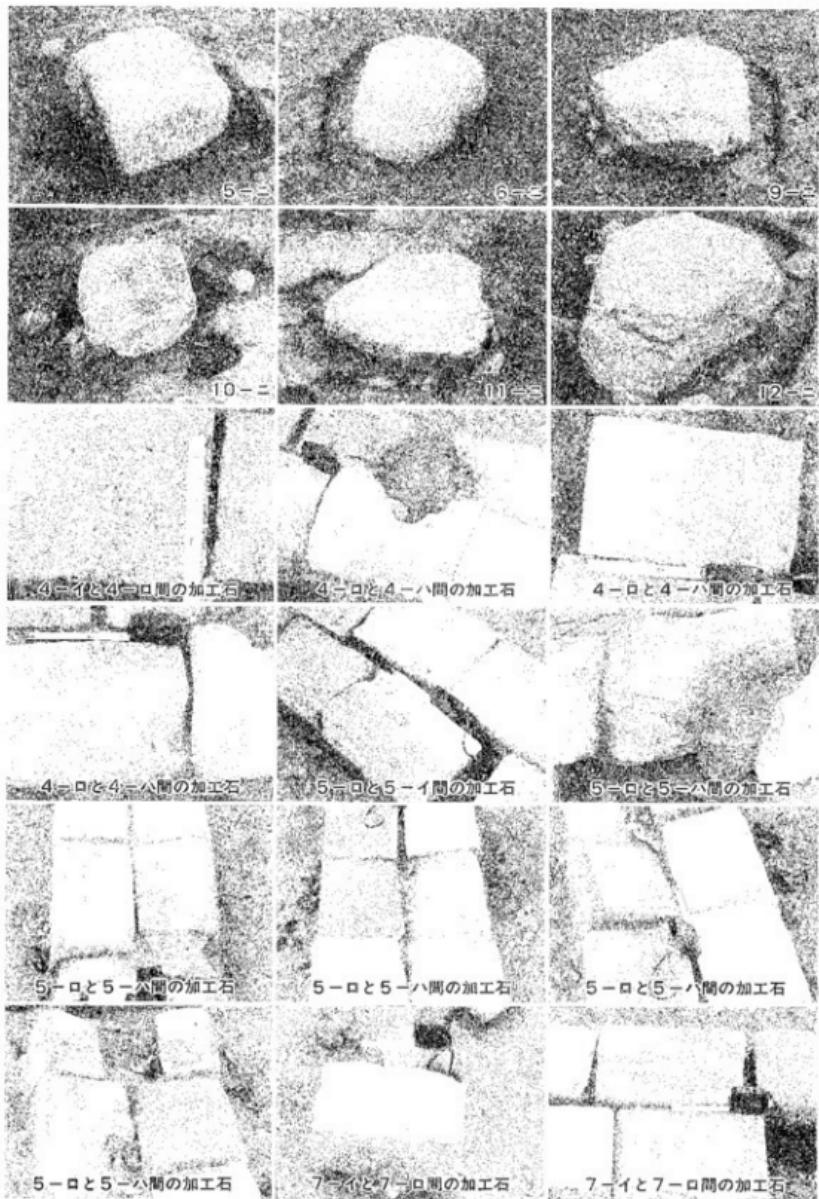
60



58







讃岐国分寺跡発掘調査位置図

S = 1 : 1500

